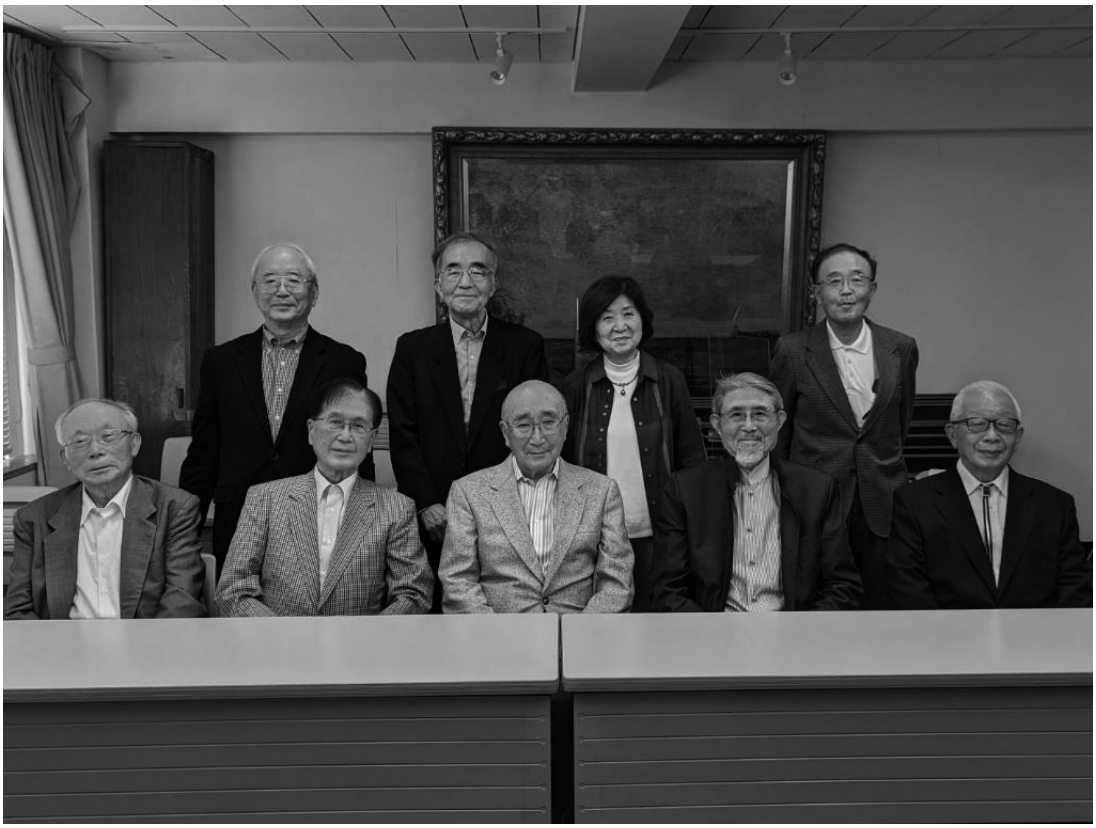
# 善隣

No.525 通巻792

2022年（令和４年）６月１日発行（毎月１日発行）

2022 6

一般社団法人 国際善隣協会



2022年４月25日「顧問会」を２年ぶりに開催しました。前列左から、八島継男顧問、成田正路顧問、古海建一最高顧問、藤原作弥顧問、矢野一彌会長、後列は常務会メンバーです。５月の社員総会を控えて、最近の協会の実情を報告し、大所高所からのご意見を伺いました。（事務局長　藤沼弘一）

# 善隣　目　次　2022年6月号

## 公開講演会記録

新疆におけるウイグル族「人権問題」の真相 ……村田忠禧　2

記念館で交差する引揚げの記憶
——「ドイツ人追放」の歴史と出会って ……三沢亜紀　10

戦後日本における満洲の記憶
——＜忘却－構築＞の相克と多様な眼差し ……菅野智博　17

**陶々俳壇** ……馬場由紀子選　25

**会員彼是**

中東噺　イランと「おしん」……牛木久雄　26

**中国ウォッチング** ……編・訳　上松玲子　28

協会通信・会員だより・同好会だより……　30

2022年6月の行事予定 ……　31

**みんなの写真館** ……　30
（姜晋如、八島継男、村田嘉明）

**善　隣**　第525号　通巻792号
2022（令和4）年6月1日発行
発行所　〒105-0004　東京都港区新橋1-5-5
一般社団法人　国際善隣協会
TEL　03（3573）3051
FAX　03（3573）1783
発行人　矢野一彌
編　集　原田克子
編集協力　朝　浩之、校　正　菅沼玲子
印刷所　㈲ゆにおんプレス
定価　一部400円　年額4,800円
振替　00120-0-145956
国際標準逐次刊行物　ISSN 0386-0345
ⓒ禁無断転載

当協会は、中国ならびに近隣諸国との相互理解を深め、友好親善・交流を推進しています。
一般社団法人　国際善隣協会

公開講演会記録

# 新疆における ウイグル族「人権問題」の真相

横浜国立大学名誉教授　村田忠禧（会員）

## 意図的に作り上げられた「ウイグル族人権問題」

トランプ政権下で国務長官を務めたマイク・ポンペオは退任直前の２０２１年１月19日に、声明で中国の新疆ウイグル自治区でのウイグル族への弾圧を「ジェノサイド」（民族大量虐殺）、かつ人道に対する罪と認定したと発表した。後任のブリンケン国務長官もその立場を継承し、さまざまな形で中国を攻撃する材料にしている。

ヒトラーのひきいるナチス・ドイツのユダヤ人迫害の事実を記憶にとどめる努力を続けている欧米では、「ジェノサイド」の意味は容易に理解できる。問題はその視点を中国共産党の指導する現在の中国に当てはめることが正しいかどうかにある。もちろん彼らにとってはそんなことはどうでもいいのかもしれない。現実を調査・分析した結果としての認識ではなく、中国を貶めるための常套語なのだから。

一方、日本では教育現場において「南京大虐殺」を「南京事件」と教えるよう指導する文科省の姿勢が示すように、自国が犯したかつての戦争犯罪について真剣に反省する姿勢がない。「ジェノサイド」を持ち出すと日本自身の歴史認識が問題にされる恐れがある。そのため、「人権問題」という曖昧な表現を使っているように思える。

## マスコミの誘導で作られる「嫌中世論」

２０２１年12月５日の『神奈川新聞』の社会面を見て驚いた。「人権弾圧　惨状訴え」との見出しをつけ、ＪＲ川崎駅前で街頭演説する日本ウイグル協会ハリマト・ローズ副会長の写真を大きく掲載し、「中国による新疆ウイグル自治区での人権弾圧に抗議する世論を盛り上げようと、在日ウイグル人団体『日本ウイグル協会』が４日、ＪＲ川崎駅前で街頭活動を行った。１００万～３００万人の人々が強制収容されていると惨状を訴え、日本人の支援を求めた」との山元信之記者の前書付きで、彼らの宣伝活動を紹介している。

私は日本ウイグル協会の活動は一切報道すべきではない、とは主張しない。その集団が存在することは事実である。しかし彼らの主張を公共的性格のある新

# 人権弾圧 惨状訴え

## 日本ウイグル協会 街頭活動

### JR川崎駅前 ビラ配り支援求める

中国による新疆ウイグル自治区での人権弾圧に抗議する世論を盛り上げようと、在日ウイグル協会（日本ウイグル協会）が4日、JR川崎駅前で街頭活動を行った。100万～300万人の人々が強制収容されている惨状訴えを、日本人の支援を求めた。（山元　傳之）

同協会は草の根から世論（ら全国の駅頭を巡ってお呼び起したいと今年2月から）り、これまで横浜や大阪

強制収容後に死亡したウイグル人留学生の写真を手に、中国政府に抗議する「日本ウイグル協会」のハリマト・ローズ副会長　＝JR川崎駅前

山形など約40カ所で活動。

この日は関内在住のウイグル人と支援団体「ウイグルを応援する全国地方議員の会」の丸山治章長（逗子市議会議員）ら日本人支援者、計約20人が参加。通行人にビラを手渡して「訴え、同協会のハリマト・ローズ副会長は「在住ウイグル人が相次いで拘束され、家族と連絡がつかない状況。日本政府は毅然とした姿勢を示すべきだ」と訴えていた。

### 渡辺氏の「便乗」拒否

差別扇動団体代表 市民も監視の目光らせ

### レイシストを追う 時代の正体

JR川崎駅前で行われた日本ウイグル協会の街頭活動に、在日外国人を排斥するヘイト活動を繰り返す差別主義者の渡辺賢一氏が加わり、同協会のハリマト・ローズ副会長に「関係ない」「やるなら堂々とやって」と横断幕を出してはいけないことがめられる場面があった。渡辺氏はスピーチも許されず、15分ほどで立ち去った。

差別扇動団体「日の丸街宣員会」代表の渡辺氏は、

本に留学していた女性はウイグルに帰った後、強制収容されて命を落としたと、中国政府による「ウイグル人権問題」を止めるために、私たちを助けてほしい」と声を上げた。

支援の募金に応じた市内に住む男性（60）は「中国政府は態度を改め、日本も北京冬季五輪を外交的ボイコットするなど、毅然とした姿勢を示すべきだ」と話していた。

「来年2月の北京オリンピックを前に、アメリカなどが『外交的ボイコット』を表明するなど、世界が注視する新疆ウイグル自治区の人権問題。世界各地では『自治区に住む家族と連絡がつかない』と訴える人が相次いでいる。一体、何が起きているのか？　現地での監視や収容の実態を追跡する。創立から100年を迎え、民族の団結を目指す中国共産党は、ウイグル族などの少数民族をどうまとめていくのか？　その葛藤と行方を見つめる」。

「世界各地では『自治区に住む家族と連絡がつかない』と訴える人が相次いでいる」と番組紹介文は書いているが、これは事実に反する。2021年4月29日に中日青年産学連合会が開いた会議の席上、新疆から来日しているウイグル族青年がその場でウルムチの家族に電話をかけ、まったく問題なく連絡が取れることを実証してくれた。「連絡が取れない」のは何らかの特殊な事情が存在するからである。

このNHKスペシャルで主に取り上げているテーマは海外に居住し、中国政府に反対する活動を展開しているウイグル人の聞が検証抜きで大々的に紹介報道することは危険である。新疆のウイグル族の人口は1100万人ほどで、もしそのうちの100万から300万人が強制収容や集団虐殺されているとしたら、新疆は死神にとりつかれた重苦しい様相を呈するであろう。「美しい新疆」を掲げて観光業の振興に力を入れている新疆の現実からはそのような兆候はまったく窺えない。『神奈川新聞』の記事は偏見に満ちた思い込みの産物と言わざるを得ない。

しかしもっと驚いたのは12月19日に放映されたNHKスペシャル　中国新世紀（5）「〝多民族国家〟の葛藤」というテレビ番組である。番組制作者の意図は次の内容紹介から知ることができる。

動向であって、重点的に取り上げているハリマト・ローズ氏は日本ウイグル協会副会長、前述した神奈川新聞にも登場する反中国政府団体の中心的活動家である。彼を海外に居住するウイグル人の典型とみなすと、現実の中国に対する判断を間違えてしまう。公共放送を看板に掲げているNHKが偏った放送を行っている。

この番組の映像の中でデモ隊が掲げている旗に、現在は存在しない「東トルキスタン共和国」の旗があった。それを見つけた石井明・東京大学名誉教授は、昔だったら室内でしか掲げることがなかった旗なのに、日本でのデモ隊が公然と掲げていることに驚いていた。今日では中国からの分離独立を主張する「東トルキスタン・イスラム運動」（ETIM）として活動しており、ETIMは国連が2002年にテロ組織として認定している。

「2020年10月6日、米国は2004年に当時のジョージ・W・ブッシュ政権が行ったETIMのテロ組織指定を解除してマイク・ポンペオ国務長官は『ETIMが存続している確証がない』と述べ、『約10年来活動が不明な組織の存在を理由として中国共産党が新疆での弾圧を正当化している』という観点から解除した」（Wikipedia による）。

日本政府はどのような対応を示しているのか。公安調査庁のホームページは日本政府がテロ組織とみなす組織についての情報を公開している。以下はその抜粋で、原文は次のURLにある（https://www.moj.go.jp/psia/ITH/situation/E-asia/China.html）。

「中国政府の発表によれば、中国における『テロ事案』は、主に新疆ウイグル自治区で発生しているとされる。中国政府が2019年3月に発表した『新疆の反テロリズム・脱過激化闘争と人権保障』白書が取り上げている『テロ事案』は、次のとおりである。

「中国政府は、2020年10月時点で、新疆ウイグル自治区における『テロ事案』は『ほぼ4年連続で発生していない』としている」。

「なお、米国は、『中国政府は、広範囲かつ国際的につながりを有するテロリズムの脅威を口実として、新疆ウイグル自治区の少数民族住民らに対する広範な抑圧及び深刻な人権侵害を正当化している』（2020年6月17日成立の『ウイグル人権政策法』第3条第2項）との認識を示している。また、米国は、新疆ウイグル自治区について、『2017年以来、当局は、100万人以上のウイグル族、その他の少数民族及び宗教的マイノリティを、強制労働、イデオロギー教化及び身体的・心理的虐待が行われている教化施設に収容してきた』とも指摘している」。

公安調査庁の姿勢は客観的であるかのようだが、本質的には米国に追随しているとみなすしかない。

米国を大本営とする反中国キャンペーンに対して新疆ウイグル自治区政府は2021年12月13日、北京で記者会見を開いて反論している。過去の新疆暴力事件の被害者、経験者および家族が暴力事件の経緯を語り、これまで未公開にしてきた写真や動画を公開した。あまりに生々しい映像であるため『天山網』は数日後

〈「新疆の反テロ・脱過激化闘争と人権保障」白書掲載事案〉

| 発生日 | 発生場所 | 概要 |
|---|---|---|
| 90・4・5 | クズルス・キルギス自治州アクト県バリン郷 | 同郷政府を襲撃（武警6人死亡） |
| 92・2・5 | ウルムチ市 | バスを爆破（3人死亡、23人負傷） |
| 93・8・24 | カシュガル地区カルギリク県 | モスク関係者を襲撃 |
| 96・3・22 | アクス地区トクス県 | 同県イスラム教協会副会長を射殺 |
| 96・5・12 | カシュガル市 | 中国イスラム教協会副会長を襲撃 |
| 96・8・27 | カシュガル地区カルギリク県ジャンギリエスキ郷 | 同郷政府を襲撃（6人死亡） |
| 97・2・5～2・8 | グルジャ市 | 「暴乱」（7人死亡、198人負傷） |
| 97・2・25 | ウルムチ市 | バスを爆破（9人死亡、68人負傷） |
| 97・11・6 | アクス地区バイ県 | モスク関係者を射殺 |
| 98・1・27 | アクス地区バイ県 | モスク関係者を射殺 |
| 98・5・23 | ウルムチ市 | 放火15件 |
| 99・10・24 | カシュガル地区ポスカム県セイリ郷 | 同郷公安派出所を銃や爆破装置で襲撃（2人死亡、2人負傷） |
| 08・3・7 | ウルムチ市から北京市に向かう航空機内 | 破壊装置を携帯した人物が搭乗 |
| 08・8・4 | カシュガル市 | 武警の隊列に車で突入、手りゅう弾で襲撃（16人死亡、16人負傷） |
| 09・7・5 | ウルムチ市 | 暴動（197人死亡、1700人以上負傷） |
| 11・7・30 | カシュガル市 | 民衆を刃物で襲撃（8人死亡、27人負傷） |
| 11・7・31 | カシュガル市 | 通行人を襲撃（6人死亡、15人負傷） |
| 12・2・28 | カシュガル地区カルギリク県 | 民衆を刃物で襲撃（15人死亡、20人負傷） |
| 12・6・29 | ホータン地区からウルムチ市に向かう航空機内 | 米国同時多発テロ事件を模倣したハイジャックを企図 |
| 13・4・23 | カシュガル市マラルベシ県シェリクブヤ鎮 | 同鎮政府職員等を襲撃（15人死亡、2人重傷） |
| 13・6・26 | トルファン地区ピチャン県ルクチン鎮 | 同鎮派出所、鎮政府等を襲撃（24人死亡、25人負傷） |
| 13・10・28 | 北京市（天安門金水橋） | 車で突入（2人死亡、40人以上負傷） |
| 14・3・1 | 昆明市駅広場等 | 民衆を刃物で襲撃（31人死亡、141人負傷） |
| 14・4・30 | ウルムチ市ウルムチ南駅 | 民衆を短刀や爆破装置で襲撃（3人死亡、79人負傷） |
| 14・5・22 | ウルムチ市サイバグ区公園北街の朝市 | 車で突入、爆破装置で襲撃（39人死亡、94人負傷） |
| 14・7・28 | カシュガル地区ヤルカンド県エリシク鎮、ハンディ鎮 | エリシク鎮政府、派出所を襲撃。ハンディ鎮で車両放火等（37人死亡、13人負傷） |
| 14・7・30 | カシュガル市 | 新疆イスラム教協会副会長を殺害 |
| 14・9・21 | バインゴリン・モンゴル自治州ブグル県イェンギサル鎮 | 同鎮派出所、市場等を襲撃（10人死亡、54人負傷） |
| 15・9・18 | アクス地区バイ県 | 炭鉱を襲撃（16人死亡、18人負傷） |
| 16・12・28 | ホータン地区カラカシュ県 | 同県党委員会建物を爆破装置で襲撃（2人死亡、3人負傷） |

には掲載を取り下げている。人々の感情を配慮してのことであろう。

自治区政府スポークスマンの徐貴相は次のように語った。

「徐貴相は、法に基づきテロを厳しく取り締まることは新疆の社会の安定を守り、人権を保障するための必然的な選択だと述べた。新疆はテロ対策を特定の区域、民族、宗教と結び付けないことを堅持し、寛大と厳格を織り交ぜた予防・教育・救済の結合を堅持し、テロリズムを生み出す土壌を効果的に取り除き、テロ活動の多発・頻発の勢いを効果的に抑制し、各民族大衆の生命・財産の安全を力強く守っている。

いわゆる新疆に関わる問題とは反テロ、脱極端化、反分裂の問題である。米国と西側の反中国勢力は反テロ問題を『汚名化』し、分裂問題を『民主化』し、人権問題を『政治化』しようとしているが、決して実現できない。いかなる勢力もあえて一線を超えて新疆の繁栄・安定の局面を破壊しようとすれば、必ず一敗地にまみれるであろう」。

なお冬季オリンピック開幕を目前に控えた1月27日にも自治区政府は北京で記者会見を行い、米国などが流しているデマを批判している。しかし聞く耳を持たない日本の衆議院は2月1日に「新疆ウイグル等における深刻な人権状況に対する決議案」なるものを採択している。国会議員の深刻な知的退廃ぶりに改めて驚く。

## 新疆の概況

新疆ウイグル自治区は、ユーラシア大陸の中部に位置し、中国の西北の辺境に位置し、総面積は166万㎢、全国陸地総面積の6分の1を占め、国内はチベット、青海、甘粛などの省・自治区に隣接し、周辺はモンゴル、ロシア、カザフスタン、キルギスタン、タジキスタン、アフガニスタン、パキスタン、インドと接している。

新疆の地形は北にはアルタイ山脈、南は崑崙山脈、天山山脈が中部を横切っており、新疆を南北に二分しており、天山以南を南疆、以北を北疆と呼んでいる。南疆のタリム盆地は中国最大の内陸盆地。タリム盆地の中部に位置するタクラマカン砂漠は中国最大、世界第2位の流動砂漠。北疆のジュンガル盆地は中国で2番目に大きい盆地。ジュンガル盆地中部のグルバンツングート砂漠は中国で2番目に大きい砂漠。天山の東部と西部には、「火洲」と呼ばれるトルファン盆地と「塞外江南」と呼ばれる伊犁谷地がある。現在のオアシスの面積は14・3万㎢で、国土の総面積の8・7%を占めており、そのうち天然のオアシスの面積は8・1万㎢で、オアシスの総面積の56・6%を占めている。

新疆は面積は広大だが人々が暮らすのに適した土地はあまり多くはない。

## 新疆の人口状況

新疆の自然環境を理解した上で、「ジェノサイド」「人権抑圧」が存在するかを考える必要がある。それを知る客観的な情報は人口の変化に現れる。

中国は10年ごとに全国統一の基準による人口調査を実施しており、第7回目が2020年11月1日を調査日として実施され、調査結果の主要なデータは2021年6月14日に全国および各省・直轄市・自治区で公表された。新疆に関しては『新疆日報』に同日掲載された。

新疆の人口状況については、さらに9月26日に国務院新聞弁公室が「新疆の人口発展」と題する白書を発表した。白書は人口という視点から新疆の歴史、人々の暮らし、各民族 とりわけウイグル族と漢族との関係の変化発展など多方面に

わたって分析を加えるとともに、海外で反中国活動を展開している組織の主張に対する批判を行っている。

この白書はこれまで行われてきた合計7回の全国人口調査、すなわち1953年、1964年、1982年、1990年、2000年、2010年、2020年の人口調査のデータを紹介している。そこで筆者は白書に公表されているデータに基づいて新疆の人口発展状況およびその指数を表にした。

1953年の漢族の数は少ないのに64年以降、急速に増えている。1953年のデータを100として2020年の各データの指数を計算してみると表2が示すとおり、新疆の少数民族は335、そのうちウイグル族は322と増加していることは確かであるが、漢族は3288と圧倒的に多い。

表3の民族比率を見ると、漢族は1953年の6・94%から1964年には31・93%と急激に高まっている。その後1982年以降になると、漢族とウイグル族、少数民族との比率に大幅な変化は見られず、安定的な発展を示している。この変化は何によって生じているのか。

新疆生産建設兵団の設置が主として関係している、というのが私の仮説である。兵団のホームページは次のように記している（http://zwfw.xjbt.gov.cn/gov/qjd/bingtuan/info.jspx）。

新疆生産建設兵団は党中央の国家統治・安定の戦略的配置であり、国の辺境管理を強化する重要な方策である。兵団は特殊な地理的、歴史的背景の下で成立したものである。

1954年10月、中央政府は新疆駐在人民解放軍第二、五、六軍の大部分、第二十二兵団のすべてを集団でその場で転業させ、国防部隊の序列から離脱させ、「中国人民解放軍新疆軍区生産建設兵団」を組織するよう命令した。当時、兵団の総人口は17万5500人であった。その後、全国各地の多くの優秀な青壮年、復転【朝鮮戦争停戦で現役解除の復員や転業】軍人、知識人、科学技術者が兵団の隊列に加わり、新

表1　新疆の人口発展状況

（万人）

| | 1953年 | 1964年 | 1982年 | 1990年 | 2000年 | 2010年 | 2020年 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 新疆総人口 | 478.36 | 727.01 | 1305.15 | 1515.69 | 1845.95 | 2181.58 | 2585.23 |
| 少数民族 | 445.15 | 494.89 | 779.75 | 846.15 | 1096.96 | 1298.59 | 1493.22 |
| ウイグル族 | 360.76 | 399.16 | 595.59 | 719.18 | 834.56 | 1000.13 | 1162.43 |
| 漢族 | 33.21 | 232.12 | 525.40 | 669.54 | 748.99 | 882.99 | 1092.01 |

表2　新疆の人口発展状況指数

（1953年＝100）

| | 1953年 | 1964年 | 1982年 | 1990年 | 2000年 | 2010年 | 2020年 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 新疆総人口 | 100 | 151.98 | 272.84 | 316.85 | 385.89 | 456.05 | 540.44 |
| 少数民族 | 100 | 111.17 | 175.17 | 190.08 | 246.42 | 291.72 | 335.44 |
| ウイグル族 | 100 | 110.64 | 165.09 | 199.35 | 231.33 | 277.23 | 322.22 |
| 漢族 | 100 | 698.95 | 1582.05 | 2016.08 | 2255.31 | 2658.81 | 3288.20 |

表3　新疆の民族比率

（%）

| | 1953年 | 1964年 | 1982年 | 1990年 | 2000年 | 2010年 | 2020年 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 少数民族 | 93.06 | 68.07 | 59.74 | 55.83 | 59.43 | 59.53 | 57.76 |
| ウイグル族 | 75.42 | 54.90 | 45.63 | 47.45 | 45.21 | 45.84 | 44.96 |
| 漢族 | 6.94 | 31.93 | 40.26 | 44.17 | 40.57 | 40.47 | 42.24 |

疆の建設に身を投じた。

１９６２年、新疆伊犁、塔城地区で前後して辺境民の越境事件が発生した。国の配置に基づいて、兵団は１万７０００人余りの幹部、従業員を現地に派遣して社会治安を維持し、代耕、代牧、代管理を実施し、新疆伊犁、塔城、アルタイ、ハミ地区とボルタラモンゴル自治州など２０００キロ余りの国境沿線に奥行き10キロから30キロの国境団場帯を迅速に建設した。これは新疆を安定させ、国の国境警備の安全を守る上でかけがえのない重要な役割を果たし、国の西北国境警備の戦略態勢を改善した。「文化大革命」期間中、兵団の屯墾戍辺事業は深刻な破壊を受けた。１９７５年３月兵団制度廃止。１９８１年12月、中央政府は兵団を「新疆生産建設兵団」として復活させることを決定した。

軍・民の大規模な移住と開墾は地元住民の権益を侵さないように進められた。北疆への設置が主で、南疆は４師団のみである。

１９９１年12月にソ連邦が崩壊し、中国は新たに誕生したカザフスタン等の周辺国々と外交関係を樹立し、国境画定も実現し、周辺国との関係は基本的に安定した。

２０１７年には習近平国家主席がカザフスタンを訪問し、全面的戦略パートナーシップの新段階に至ったことを表明する共同声明を発表。21世紀の陸のシルクロード建設にとって重要な意味を持つ。

生産建設兵団が行った開拓は新疆の北半分（北疆）が中心であり、広大な未開の土地を開墾して大規模農場を作り上げ、品質の良いことで有名な新疆綿やトマトなどの大規模生産を行っている。

筆者は２０１２年８月に横浜国立大学代表団の一員として石河子大学を訪問した際、生産建設兵団第八師で目にした光景を撮影した。

１枚は荷台にトマトを山積みしたトラクターの列。もう１枚は見渡す限りの綿花畑。「強制労働」による摘み取りであると主張する人々がいるが、この見渡す限りの綿花畑を見れば、機械による採取を考えざるを得ないだろう。

「栽培業の耕作・収穫の総合機械化率は95・２％。綿採機は２７６０台、綿採面積は７８６・67千ヘクタール（１１８０万ムー）、綿機採率は90・９％である」。「新疆生産建設兵団２０２０年国民経済・社会発展統計公報」。

１９５３年からしばらくの間、漢族が急激に増えたのには生産建設兵団の設置が大いに関わっている。しかし兵団の設置は以前からの新疆住民の利益を奪う形で実現したものではない。未開の土地を開墾することで兵団が定住する土地を確保した。中国人から土地を奪って開拓したかつての日本の満蒙開拓団とはまったく異なる。

## 新疆の未来は南疆の発展にかかっている

ここで南疆、北疆の民族構成をみることにする。「白書」には次のことが書かれているだけである。

「区域分布から見ると新疆には現在14の地（州、市）があるが、そのうち北疆が9、南疆が5である。歴史的には南北の人口分布の差は大きく、南疆の人口が新疆全体の2／3以上を占めた時期もある。経済社会の発展に伴い、南北の人口分布は次第に平衡になる傾向である」。

表4は「白書」に記されているデータをまとめたものである。現時点では2020年の調査結果はここまでしか公開されていない。

新疆ウイグル自治区統計局編『新疆統計年鑑2019』の「3―7各地、州、市、県（市）分布民族人口数」のデータを用いれば2018年の値を知ることができるが、不思議なことに2020年版の『新疆統計年鑑』にはこの項目がない。

南疆では少数民族とりわけウイグル族の占める割合が非常に高い。和田、カシュガル、アクスの3地区はウイグル族が圧倒的に多い。

**表4　南北の人口分布**

| | 人口 | | 比率 | |
|---|---|---|---|---|
| | 2010年 | 2020年 | 2010年 | 2020年 |
| 北疆 | 1135.29 | 1330.91 | 52.04 | 51.48 |
| 南疆 | 1046.29 | 1254.32 | 47.96 | 48.52 |

中国全土では漢民族が91％も占めており、少数民族が90％前後を占めるというのはチベット自治区を除いては見られない。チベットの場合は4000m級の高地という自然環境の厳しさが独特の人口構成をつくり出していることはわかる。

南疆の場合は必ずしもそうではない。

「三区三州」とは国家レベルの貧困地区。つまり中国で最も貧しいと認定された地域である。「三区」とはチベット自治区、青海、四川、甘粛、雲南の4省チベット区、および南疆の和田地区、アクス地区、カシュガル地区、クズルス・キルギス自治州の4地区を指す。「三州」とは四川省涼山州、雲南省怒江州、甘粛省臨夏州を指す。南疆は中国で最も貧しい地域の一つである。

北疆はどうだろうか。

北疆の民族の構成比はまったく異なっている。ウイグル族が一番多いのはトルファンだけ。他は漢族が最も多いが、圧倒的ではなく、さまざまな民族が共存している。

1つの民族だけで成り立っている地域は外部との交流が少なく、閉鎖的・保守的な社会になりがちである。南疆は改革開放の潮流に乗れなかった。貧困はテロ

**表5　南疆の民族分布**　（2018年）

| 地　区 | 合　計 | #少数民族 | ウイグル族 | 漢　族 | カザフ族 | 回　族 | キルギス族 | 蒙古族 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| カシュガル地区 | 4,633,781 | 93.99 | 92.56 | 6.01 | 0.00 | 0.13 | 0.15 | 0.01 |
| アクス地区 | 2,561,674 | 81.44 | 80.08 | 18.56 | 0.01 | 0.54 | 0.45 | 0.03 |
| ホータン地区 | 2,530,562 | 97.15 | 96.96 | 2.85 | 0.00 | 0.06 | 0.04 | 0.01 |
| クズルス・キルギス自治州 | 624,496 | 93.71 | 66.24 | 6.29 | 0.03 | 0.09 | 26.24 | 0.01 |
| バインゴリン・モンゴル自治州 | 1,242,125 | 46.69 | 36.38 | 53.31 | 0.11 | 5.32 | 0.02 | 4.02 |

**表6　北疆の民族分布**　（2018年）

| 地　区 | 合　計 | #少数民族 | ウイグル族 | 漢　族 | カザフ族 | 回　族 | キルギス族 | 蒙古族 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ウルムチ市 | 2,222,558 | 28.79 | 12.85 | 71.21 | 2.77 | 11.03 | 0.08 | 0.49 |
| クラマイ市 | 307,743 | 25.33 | 15.59 | 74.67 | 4.05 | 2.47 | 0.05 | 0.99 |
| 昌吉回族自治州 | 1,393,718 | 27.72 | 4.89 | 72.28 | 10.34 | 10.72 | 0.01 | 0.50 |
| イリ・カザフ自治州 | 4,582,562 | 59.91 | 17.95 | 40.09 | **27.16** | 9.35 | 0.49 | 1.61 |
| ボルタラ・モンゴル自治州 | 三　478,509 | 36.73 | 14.76 | 63.27 | 10.41 | 4.58 | 0.02 | 5.90 |
| アルタイ地区 | 659,502 | 60.15 | 1.42 | 39.85 | 52.76 | 3.82 | 0.01 | 0.99 |
| タルバガタイ地区 | 992,444 | 45.34 | 4.25 | 54.66 | 26.66 | 8.51 | 0.21 | 3.38 |
| トルファン市 | 633,416 | 83.16 | 76.96 | 16.84 | 0.05 | 5.89 | 0.00 | 0.03 |
| ハ　ミ　市 | 559,352 | 34.51 | 20.01 | 65.49 | 10.04 | 3.21 | 0.00 | 0.49 |

の温床でもある。

自己中心のやり方で経済建設を進めれば格差が拡大して行く。

取り残された人々は不満を持つようになり、社会の安定は実現できない。２００９年７月５日、ウルムチでの暴力事件の発生は衝撃であると同時に警鐘でもあった。

## 共に豊かになる社会の実現を目指す

格差拡大を解決する手段としてチベット支援、２００８年に発生した 四川大地震の救援と復興に成果をあげた「対口支援」方式が新疆でも採用された。

チベットへの全国的な支援は１９８４年３月のチベット工作座談会の開催から始まるが、１９９４年７月の第３回チベット工作座談会で「対口支援」という地域を分担して支援する独特の支援方式が確定し、２０１０年１月の第５回座談会で支援する地方の前年度財政収入の０・１％をチベット支援に充てるという方式が確定した。

このチベットの経験は２００８年５月に発生した四川大地震の救援復興に威力を発揮した。さらに２００９年に悪化した新疆情勢を改善する政策として２０１０年５月に開催された第１回目の新疆工作座談会で、19の地方が分担して新疆の安定と発展を支援することを決めた。２回目は２０１４年５月、３回目は２０２０年９月に開催されている。

新疆支援の分担状況を示す。

19の省と市の中に深圳市が含まれていることは今後の新疆の発展方向を考える上で興味深い。

２０２０年９月25～26日に開かれた第３回中央新疆工作座談会において習近平国家主席は次のように新疆の今後の発展の方向を語っている。

「発展は新疆の長期的安定の重要な基礎だ。新疆の立地の優位性を発揮し、シルクロード経済ベルトの中核区建設の推進を駆動力とし、新疆自身の地域的開放戦略を国の西への開放の全体的配置の中に組み入れ、対外開放のキャリアーを豊富にし、対外開放のレベルを高め、開放型経済体制を刷新し、内陸開放と辺境沿いの開放の高地を築かなければならない。工業の基盤強化と効率向上とモデルチェンジ・高度化を推進し、新疆の特色ある優位産業を育成・拡大し、現地の人々の収入増と富の創出を促す。建設を科学的に計画し、都市化の質を全面的に高めなければならない。緑水と青山は金山・銀山であるという理念を堅持し、生態保護のレッドラインを断固として守り、砂漠・治水と森林・草原の保護活動を統一的に展開し、麗しき新疆の空をより青く、山をより青く、水をより清らかにする」。

はたして習近平のこの展望が実現できるのか。かなりハードルは高いし、中国の要因だけで実現するものでもない。ただ新疆のさまざまな方面で積極的な動きが始まっている。色眼鏡をかけて中国を見るのではなく、公平・冷静・客観的に観察する必要があるのではなかろうか。

（２０２２年２月10日・オンライン講演会）

**筆者略歴（むらた　ただよし）**

１９４６年神奈川県生まれ。

主要著書：『天安門事件の真相』（共著）、『チャイナ・クライシス「動乱」日誌』、『現代中国治国論』（編著）、『日中領土問題の起源』、『史料徹底検証 尖閣領有』など。訳書に『周仏海日記』（共訳）、『日本軍の化学戦―中国戦場における毒ガス作戦』、『毛沢東伝１８９３～１９４９）』（共訳）、『「毛沢東の私生活」の真相』など多数。

公開講演会記録

# 記念館で交差する引揚げの記憶
## ――「ドイツ人追放」の歴史と出会って

満蒙開拓平和記念館　三沢亜紀

### 1．記念館開館の経緯

「今ごろこんなもの作って誰が来るんだ」。元開拓団のおじいちゃんが放った言葉が忘れられません。記念館建設に向けた活動を展開している最中でした。自分たちが建立した慰霊碑に子どもや孫たちは関心がなく、この先の維持管理に頭を悩ませている状況にあって、記念館など作っても誰も来ないだろう……。その裏側には、戦後の日本社会の中でほとんど顧みられずに生きてきた人々のあきらめと悔しさが滲んでいました。開拓団を全国で最も多く送り出した長野県下伊那。この地域でさえ、満蒙開拓は風化しつつある歴史だったのです。

満蒙開拓平和記念館（以下記念館）は２０１３年４月にオープンしました。今年で10年目に入ります。建設母体となったのは飯田日中友好協会。活動の中心は、この地域に帰ってきた中国帰国者の皆さんの生活、仕事、住まいなどの支援や交流事業でした。90年代には帰国者家族の皆さんとバス16台を連ねて名古屋の動物園へバスハイクに行ったという記録も！　活発な活動をしていたことがうかがえます。

帰国者の皆さんの生活が少しずつ落ち着く中で、活動は歴史の「継承」にシフトし、語り部の会の発足や体験の聞き取りといった取り組みが進められていきます。ところが、背景にあった満蒙開拓の実態を調査しようにも、日本中どこにも記念館・資料館の類いはありません。体験者が少なくなる危機感もあり、今こそこの歴史を残す拠点を作らなければならないとの決意で、２００６年に建設に向けた活動が開始されました。開館までの足掛け８年の期間にはリーマンショックや東日本大震災などがあり、関係団体の開拓自興会もすでに解散。支援団体がほとんどない中で民間寄付だけではどうしても資金が足りず、各方面からのご協力を得てようやく行政からの助成金が叶い、記念館建設が実現しました。

事業計画ではどう見積もっても年間来館者数５０００人でした。あまり知られていない歴史テーマであり、しかもアクセスの悪い立地。職員２人でのんびりと来館者とお茶でも飲んで……、実はそんなイメージをしていました。ところが。開館以来たいへんな反響で、押し寄せる

お客様と鳴り続ける電話に数カ月忙殺されました。パンフレットはない、看板もない、団体予約の受付方法なども後手後手。満蒙開拓という歴史を伝えようという市民活動から、自覚も準備もないまま一気にお客様商売もしなければならなくなったのです。何もかもが手探りで歩み続けて丸9年。来館者は20万人を超えました。

満蒙開拓平和記念館外観

## 2．記念館で行き交う人・モノ・情報

### ◇人

開館当初に詰めかけてくださった体験者の方々の姿は忘れられません。満州の地図の前に立ち尽くして涙する人。開拓団名簿に同級生の名前を見つけて手を合わせる人。電話口で「初めて他人に話す」と言って引揚げ体験を語る人。記念館は広島や沖縄といった〝現場〟ではありませんが、体験者にとっては記憶を蘇らせる場であり、心の奥に閉じ込めていた感情を吐露する場であり、亡くした人に思いを馳せる慰霊の場ともなっていきました。

中には、親が満鉄で働いていた、祖父が関東軍の兵隊だった、などという人たちも。一つ、エピソードをご紹介しましょう。

ハルビン市内にあった桃山小学校の同窓会の方々から来館のご予約がありました。できれば当時のハルビンを知る人と交流したいとのご要望でした。桃山小学校といえば、開拓団にとってみると敗戦後の避難民収容所です。当日は、そこで越冬した青少年義勇軍の語り部Yさんに来ていただきました。極寒の収容所生活の中で、Yさんの仲間たちも大勢亡くなっています。一方、桃山小学校に通っていた子どもたちは、親から「病気がうつるから学校へ行ってはいけない」と諭されていたそうです。同じ日本人として何かできなかったのだろうかと、同窓会の幹事さんはずっと引っ掛かっていたそうです。最後に彼は「私たちのような日本人を、Yさんはどう思っていますか」と尋ねました。Yさんはじっと考えてから「日本へ帰りたいという思いは、同じだったと思います」と静かに答えました。

来館者それぞれの満州体験が、満州を立体的に浮き上がらせていきます。

### ◇モノ

「満州」「満蒙開拓」をテーマにした記念館は他になかったため、開館後はたくさんの資料の寄贈がありました。データベースにするため、日夜インプットや分類作業をしていますが、日常業務の中心は来館者対応のため追いつかない状況です。寄贈者は延べ1500人にのぼり、資料点数は把握しきれません。昨年ようやく、戦後出版された書籍を中心に約2000冊を図書ルームに配架することができました。

寄贈品の中には当時の貴重な資料もあります。開拓団は引揚げ時、ほぼ着の身着のままであったため写真1枚持ち帰ることができなかったという人がほとんどなのですが、それでも、終戦前に内地の

親戚に送ってあった写真や手紙、引揚げ時の書類などが集まってきます。特に、体験談は冊子や書籍になっているものから、広告の裏に書かれているものまで数多く寄せられました。それぞれの資料に、一人ひとりの生きた証が残されています。

**◇情報**

最近多いのは、親世代の満州での足跡を辿る人たちの来館や問い合わせです。直接は話してくれなかった、あるいは聴こうとしなかった、もっと聴いておけばよかった、という次の世代の人たちです。中国帰国者家族も時々来館されます。なぜ、日本に帰ってきたのか、そもそもなぜ日本にルーツがあったのかも知らないまま帰国した2、3世の人たちの中には、ここに来て初めて家族が辿った歴史の背景を知るという人たちもいます。困難を乗り越えてきた家族に誇りを持つことができたと言って帰っていった若い女性もいました。

満州についてのさまざまな質問や問い合わせもあります。○○県から行った開拓団の入植場所について。引揚者名簿のこと。満州国時代の医療や教育について。教科書会社からは資料利用の依頼。当時の公的な資料がそろっているわけではなく、研究者でもない私たちですが、収蔵資料を調べ精一杯の対応をしています。でも、いつも思うのは、本来であれば公的な専門機関を設け、資料の収集や管理、研究、情報提供などをするべきだったのではないかということです。体験者が少なくなる中で、私たちの記念館がこれから担っていく役割と社会からの期待はさらに大きくなっていくのだろうと思います。

## 3．ドイツの人たちとの出会い

**◇ドイツへ導かれて**

そんなプラットホームのような記念館ではさまざまな人が行き交い、つながっていき、奇跡を起こすこともあります。

２０１７年、ドイツ在住の日本人女性フックス真理子さんからメールが届きました。「被追放者女性同盟」という団体から日本の満蒙開拓団のことについて講演を頼まれているとのこと。ドイツの引揚者団体であるそのおばあちゃんたちは、今でも頻繁に学習会を開催し、さらにその学習会には国からの支援があるというのです。そのいかつい名前の組織は一体何だろう。そこから「ドイツ人追放」の歴史を辿ることになります。

翌２０１８年、祖父母がドイツ系で終戦時にポーランドからドイツへ引揚げてきた経験を持つ上智大学の木村護郎クリストフ先生を講座にお呼びし、満蒙開拓と「ドイツ人追放」の歴史の共通点や違いについてお話しいただきました。ドイツにもソ連軍の侵攻、敗戦とともに占領地などから逃げ戻らなければならなかった人々がいました。その数、１２００万人。「引揚げ」ではなく「追放」という言葉に、終戦時にドイツ民族に向けられた容赦ない報復の厳しさが伝わってきます。ソ連軍の侵攻で逃避行を余儀なくされ、ナチスドイツに恨みを持つ現地住民からの暴力的な「追放」に遭った人々の姿は、満州の日本人そのものでした。さかのぼれば、軍事力で領土を拡大し、実効支配として自国民を入植させていく帝国主義的占領政策から共通しているといえます。一方、戦後の近隣諸国との対話を重ねた和解や、国としての負の歴史への向き合い方については皆さんもご存知のとおりですが、あまり知られていないのは、ドイツも時間がかかったということです。多面的な歴史観と自国の過ちを認める強さを持って対話の努力をしてきたドイツとポーランド。その歩みは、日本の私たちへ示唆を与えてくれるものであり、記念館は対話の場という大切な使

命と可能性があることを気づかされる講座でした。

ちょうどその頃、いつか行きたいと思っていたポーランドのアウシュビッツ博物館で唯一の日本人ガイドとして活躍する中谷剛さんが、来日に合わせてわざわざ記念館へ来てくださいました。これを機に、ヨーロッパ研修旅行を決断。アウシュビッツとあわせて、フックス真理子さんのお誘いでドイツにも行き、そこで「被追放者女性同盟」の方々と交流する時間を持つこととなりました。

## ◇「ドイツ人追放」とは

舞台はボンにある国立歴史博物館。こちらは戦後のドイツの歩みを辿る現代史の博物館ですが、1階のエントランスの正面に、まずはホロコーストの展示がありました。ドイツの現代史はホロコーストが起点となるという歴史観が表現されていたのだと思います。展示は、東西に分かれたそれぞれの歩みから、ベルリンの壁の崩壊、近年の移民受け入れ問題まで。当時のメルケル首相を揶揄するような展示もあり、国立博物館でありながら言論、表現の自由と独立性が保たれていることに感心させられました。

この博物館で２００５〜２００６年に「追放と統合」という「ドイツ人追放」の歴史をテーマにした特別展が開催されました。有名なブラント首相の時代以降、ドイツは自国の加害の歴史に向き合う姿勢をナショナルアイデンティティとして確立してきました。そんな中で、追放者の歴史、その被害性をどう扱うのかはたいへん難しい問題だったようです。ただ、ドイツの中でも近年あまり触れられなかった歴史ということで、多くの若い世代にとっては初めて出会う歴史であり、展示の内容も、その総括というよりもまずはその史実を伝えるというスタンスだったようです。

ここで改めて「ドイツ人追放」の歴史をみておきます。ドイツの敗戦とともに、周辺国に住んでいたドイツ人はドイツへ「追放」されます。追放の中身を大別すると、①ソ連軍からの避難、②暴力的な追放、③ポツダム協定による秩序ある強制移住です。③においても移送を待つ間は終戦後の満州と同様、暴力を受けたり、悲惨な収容所生活で大勢の犠牲者が出たそうです。

では、どこからの追放だったのか。ヨーロッパの場合、何世紀にもわたりいろいろな民族が入り交じって住んでおり、ドイツ系の人々もポーランド、チェコ、ハンガリー、ルーマニアなど各地でそれぞれにドイツの文化を大切に生活していました。ところが、ドイツ敗戦とともに、先祖代々生きてきた土地を離れなければならないことに。さらに、ポーランドの国土が西側へ移動したため、戦前までドイツ領であった東部地域がポーランド領になり、そこから追われた人が約７００万人と圧倒的多数を占めます。ナチス時代の占領地を追われただけでなく、先祖代々住んでいた自分の土地を追い出された経験を持つ人たちは戦後、強烈な〝被害体験〟としての記憶を持ち続けました。「追放者」の背景はたいへん複雑といえます。

## ◇「被追放者女性同盟」とは

見学を終え、いよいよ交流会のスタート。昼食をはさんで４時間に及ぶ濃厚な時間でした。

コーディネーターのフックス真理子さんとそのお仲間が通訳をしてくださり、ドイツから４名と私たちのあわせて20人ほど。

初めに立ち上がって挨拶をしたのは、女性同盟会長のマリア・ヴェアタンさん、元教師。１９８１年にルーマニアから帰還した「後期帰還者」と呼ばれるカテゴリーに属します。あのチャウシェスク独

裁政権下においてはドイツ語を禁止された時もあったといいます。ちなみに「後期帰還者」の多くは東欧各国が民主化された後にドイツへ帰ってきた人たちです。終戦後もとり残されていたり、移住を強要されなかったり、逆に労働力として留め置かれ移住を遮られるなど、さまざまな形で国外に残っていたドイツ人は約４００万人いたといわれています。

彼女の話をまとめてみます。

●満州からの引揚者と自分たちは、国策であったことと加害者であり被害者であるという共通点がある。

●同盟の女性たちは隣国の人々とお互いの体験を話し合うことで理解を深める努力をしてきた。

●私たちの文化の中でその経験が還元＝生かされることが大切。

続いて同じく同盟の幹部であるヘルガ・エングスフーバーさん、元検事長。１９４５年にチェコスロヴァキアから弟たちと一緒に悲惨な逃避行の末に帰還した人です。彼女がはじめに述べたことは、ドイツが戦後、国としてナチスドイツが犯した罪に（ゆっくりとではあったが）向き合い、教育の場でも伝えていることに誇りを持っている、ということでした。

実は、西ドイツにおいて被追放者で構成する諸団体は戦後、自らの故郷を取り戻す運動を展開します。旧東部領問題・国境問題、つまり戦後ポーランド領になった元ドイツ領の返還を主張。ポツダム会談で決められたオーデル・ナイセ線を国境にするわけにはいきません。全人口の20％近くに及ぶ被追放者は当然選挙では大票田であり、政治的にも発言力がありました。戦争被害者であり、ソ連によって故地を奪われた〝共産主義の被害者〟でもあった彼らは、ポーランドとの和解においては、いわば抵抗勢力であったわけです。しかし、東ドイツとポーランドは１９５０年に国交を樹立し、国境は既成事実化していきます。50年代以降は西ドイツも東方外交を進め、被追放者団体の主張は国際社会の動きと逆行。世代交代もあって、少数派となった一部の勢力は右派政党と結びつくといった流れになったそうです。

その後、彼女たちはどのような道を辿ったのか。その答えがマリアさん、ヘルガさんの挨拶にありました。対話による和解は、お互いの痛みを乗り越える力になったことでしょう。学び合いは自国の加害に向き合う力に。さらに、自分たちの体験を社会にどう生かすのかという発想にまで到達しています。フックス真理子さんが講師に招かれたように、彼女たちは今でも貪欲に学び合い、その成果を出版物として発信し、記録しています。加害の歴史に向き合い確立したドイツのアイデンティティを、彼女たちも彼女たちの歴史を乗り越えながら体得していったのだと思います。

とにかく、堂々と語る彼女たちの姿は圧倒的でした。もちろん、それぞれ被害体験も語ってくださいましたが、果たして、日本の引揚者たちが、中でも女性たちが、自らの体験を通して自国の歴史に言及したり、その体験を社会に〝還元する〟といった発想を持つことができたのか。インテリ層である彼女たちとて、ドイツであれ、引揚者・帰還者の辛酸は十分舐めてきたはず。でもそれを乗り越える力の源泉には学ぶ場があり、対話があり、さらに議論があったからではないか、そしてそのような機会が残念ながら日本の引揚者の中にはなかったのではないかと思うのです。

前述したように、日本の引揚者たちは口を閉ざし、日本社会は「満州」に蓋をしてきました。彼らは傷を癒す場もなく、歴史を客観視する機会もなく、他者との対話によって乗り越え得る痛みも痛みのまま抱えています。近年ようやく地域社

会の中で語る機会ができてきたとはいえ、それは体験談にとどまり、それを踏まえた社会的発言をしている人はほとんど見当たりません。私たちの社会は結局、その人たちの体験を生かすことができないまま、近隣諸国との対話も進まないまま、今に至っているといえます。

こうして、刺激的な交流会はほぼドイツ側の人たちの発言に終始し、私たち日本側はただ圧倒されて終わったに等しかったのですが、それでも、当事者との交流という貴重な時間を得、ドイツの人々に多いに学び、別れを惜しんだのでした。まさか、続きがあるとは思いもせずに。

## 4．記念館セミナー棟竣工記念シンポジウム「日本とドイツの引揚者・帰国者の戦後」

2019年10月19日。記念館は別館セミナー棟竣工式を迎えました。椅子席であれば100人は収容できるセミナールームが完成したのです。その記念シンポジウム、ドイツから「被追放者女性同盟」の方々をお招きしました。お招きしたといっても、実際は彼女たちから来日を希望され、特に84歳になるヘルガさんが積極的だったそうです。フックス真理子さんのアテンドで、ドイツからはマリアさん、ヘルガさん、もう一人、後期帰還者のローゼマリーさんが来日。コーディネーター役を木村護郎クリストフ先生にお願いすることができ、日本側からは、祖母が中国残留婦人である長崎大学准教授の南誠先生にパネリストに加わっていただきました。

ドイツの人たちを招いて開催したシンポジウム

当日は県内外から100人が聴講に詰めかけ、彼女たちにはより具体的な自らの体験を語っていただきました。敗戦時の凄惨な逃避行、現地住民からの襲撃、戦後祖国へ帰ってきてからの周りの人々との軋轢などは、私たちが聴いてきた満州からの引揚げ体験と重なるものでした。さらに、戦後も周辺国に残った人々が受けた迫害や将来への不安、帰国後に受けた差別にも、中国残留邦人と共通するものがありました。

一方、被追放者へのさまざまな法的支援と、それによって社会に包摂されていったドイツの過程は、実社会での経済的格差などはあったものの、日本との違いを感じました。

さらに話は現代の難民問題へ。1200万人もの「被追放者」を受け入れながらも復興を遂げ、先進国として国際社会から認められてきたドイツ。戦時中は多数のユダヤ人がアメリカなど国外へ亡命したという歴史があります。さらに、ベルリンの壁崩壊後には東欧からも多くの人々を受け入れました。こうしたドイツの歴史は、人々の亡命権を保障すべきという考えを生み出しました。一方で、当時問題になっていたのは経済的難民の受入れで、メルケル政権は積極的な政策を打ち出していましたが、世論は揺れており、被追放者の人々は自らの経験を相対化し、亡命者と難民の違いや包摂の難しさなどの議論を展開していました。

まさにこれが、自分たちの経験を社会に〝還元する〟ということなのでしょう。

過去の体験を今の社会や政策に反映させるということなのだと思います。歴史を現在や未来に生かす。ドイツ社会の力強さを見せつけられる思いでした。

ドイツ語と日本語が飛び交う熱気に満ちたシンポジウムをいよいよ閉じようとした時、最前列で聴講していた元開拓団の一人が立ち上がり、ヘルガさんのもとに歩み寄って手を取るという思いがけないことが起こりました。するとヘルガさんも立ち上がり、開拓団の皆さんのもとへ。会場は大きな拍手と温かい笑顔に包まれました。

東アジアとヨーロッパの遠く離れたところで同じ時代に同じような体験をした人たち。大切な人を失い、戦後も苦難を乗り越えてきた人たちが手を取り合い、お互いをいたわり、ねぎらう。時空を越えて記憶が交差する奇跡のような瞬間。心ふるえるエンディングでした。

## 5．対話と学びの先に

「ドイツ人追放」の歴史に出会い、ヨーロッパの歴史と相対化することで満蒙開拓がより鮮やかに見えてきたように思います。

何よりも、記念館を拠点につながった人の縁で、ドイツの人たちとこのような交流ができたことは信じ難い成果でした。彼女たちの戦後の歩みは、これから私たちがやるべきことを示唆してくれています。お互いの体験を語り合い聴き合う対話、他者の体験に耳を傾けようとする力が導いた隣国の人々との和解、そしてこの歴史について、ときには議論を交わし学び続けることが社会を創る力、加害の歴史を乗り越える力につながっていくということを、被追放者女性同盟の方々に教わりました。

新型コロナウイルス感染拡大により記念館も大きな打撃を受けておりますが、逆に小中学校の修学旅行の来館は増えており、これからの課題である次世代への継承は思わぬ形で前進しています。子どもたちは軽々と国境を越え、民族を越え、さまざまな立場に立って考えます。その垣根のない想像力に希望を感じます。

これからも私たちは、多くの人たちとつながりながら学び続けていきたいと思います。

ヘルガさんと元開拓団員

＊オンライン講演会の要旨をとのご依頼でしたが、少し内容を変更いたしましたこと、ご了承ください。

参考文献
●川喜田敦子『東欧からのドイツ人の「追放」二〇世紀の住民移動の歴史のなかで』（白水社、２０１９年）
●佐藤成基「忘れられた領土―東方領土問題と戦後ドイツのナショナル・アイデンティティー」（茨城大学人文学部紀要№37、２００２年）

（２０２２年２月17日・オンライン講演会）

**筆者略歴（みさわ　あき）**
１９６７年（昭和42年）広島県因島市（現尾道市）生まれ。大学生活と会社員生活のあわせて８年間を東京で過ごしたのち長野県飯田市へ移住。飯田ケーブルテレビで15年間番組制作にたずさわり、２００９年12月より満蒙開拓平和記念館事業準備会の事務局員となる。現在、満蒙開拓平和記念館事務局長。

公開講演会記録

# 戦後日本における満洲の記憶
## ――〈忘却―構築〉の相克と多様な眼差し

慶應義塾大学経済学部准教授　菅野智博

### はじめに

第２次世界大戦後の帝国解体に伴って発生した外地から内地に向かう人々の移動は、「引揚げ」と呼ばれている。民間人・軍人あわせて６５０万人にも及ぶ人々の移動は、単なる人の国際移動にとどまらず、人々の生活環境の変化や社会秩序の激変を伴うものであり、また戦後日本社会の再建にも関わる歴史的出来事であった。しかし、膨大な引揚者がいたにもかかわらず、戦後日本社会は彼らに目を向けることなく、「植民地体験の忘却」から始まった。引揚げ研究で先駆的な業績を挙げている加藤聖文は、「戦後日本は大日本帝国のなかでの多民族性・戦争犠牲者・植民地体験を忘却することからはじまった」ことを指摘し、戦後日本社会の中で満洲引揚者の経験は、「公的な歴史」としては記憶されず、「海外引揚げをめぐる歴史と存在は顧みられることないまま戦後史の奥底に沈殿していった」と言及している（加藤２０１５年）。このような戦後日本社会から「忘却」に対し、引揚者はどのように自分たちの歴史や記憶を「構築」しながら「抵抗」したのだろうか。引揚者の戦後の歩みを解明することは、日本と東アジアとの交流などを考える上でも重要な課題であるといえよう。

本講演では、近年満洲引揚者を対象とする調査・研究を進めてきた「満洲の記憶」研究会（以下、記憶研と略す）の活動に焦点をあて、その活動内容や成果から見えてきた戦後日本の満洲記憶の一端を紹介する。

### １．記憶と記録の収集――引揚者との出会いと研究会の活動

ここでは、研究会のメンバーが執筆した各活動紹介文（文末の参考文献を参照）をもとに、研究会の設立経緯や活動内容について簡単に述べる。

#### (1)　研究会設立の背景

記憶研は、オーラルヒストリーや文献史学に関連する研究に携わってきた大学院生や若手研究者を中心に、２０１３年７月に設立された。研究会設立以前か

ら、既に一部のメンバーによる共同研究や聞き取り調査、引揚者との交流が行われていた。そして、メンバーが様々な引揚者と交流する中で、文献史料を補うものとしてのオーラルヒストリーの可能性や、引揚者が個別に所蔵する文献の収集・保存活動への重要性・緊急性を認識するに至った。インタビューや文献収集の重要性・緊急性とは、満洲経験者の高齢化や引揚者団体の解散に伴って、様々な記憶や記録が散逸しつつある状況を指す。そして、失われつつあるのは満洲経験の記憶のみならず、手記や写真、回想録などといった種々の史資料も含まれている。廃棄されたり、整理されぬまま埋もれたりしている史資料が相当数あることが、関係者との交流の中から明らかになった。このような状況の中で、記憶研は満洲に関わる様々な記憶を体系的に収集・分析しつつ、その成果を関係者に発信していくことを目的に設立したのである。

また、活動を開始した背景には、蘭信三、坂部晶子、山本有造、松重充浩などによる、満洲からの引揚者のライフストーリー研究や「満洲の記憶」に関連した歴史学研究の蓄積の存在がある。記憶研では、このような既存の研究蓄積やその研究方法を参照しながらも、戦後史との連続性を追究したオーラルヒストリー調査並びに引揚者団体が発行した史資料の収集に力点を置いている。

### (2) 活動内容

記憶研の活動はこれまで北海道、新潟県、福島県、長野県、静岡県、三重県、愛知県、京都府、大阪府、岡山県、和歌山県、山口県、大分県など日本各地で展開してきた。その活動内容は主に以下の２つに大別できる。

１つ目は、満洲経験者への聞き取りである。２０１３年の夏に成立以降、多くの満洲経験者のライフヒストリーを伺うことができた。また満洲の多様性をより浮き彫りにするために、各都市関係者、開拓団関係者、中国残留日本人、「満洲国」（以下、カッコ省略）軍関係者など、異なる性別や生業、世代、地域の引揚者を対象とする詳細な聞き取りを実施してきた。そして、そのうちの２人のインフォーマントの記録を整理し、国外の学術誌に投稿した（大野ら２０１６年、菅野ら２０２０年ａ）。

２つ目は、満洲引揚者団体や個人が所蔵する関連史資料の収集・整理である。関連史資料が散逸しないよう、これまで積極的に多くの団体や個人が所蔵している史資料の収集および整理を行ってきた。収集した史資料は主に各引揚者団体の会報・会誌や個人回想録、関連文献、写真や絵葉書などのビジュアル資料、モノ資料など多岐にわたる。

### (3) これまで収集した史資料

以下では、収集してきた主要な史資料の一部をいくつかに分類して紹介する。

①会報

記憶研の史資料収集は、特に様々な満洲引揚者団体によって発行されていた会報・会誌に重点を置いてきた。引揚者の多くは、満洲での人間関係に基づいた団体に属する傾向にあり、少なからぬ数の団体が戦後早い段階から会員内部の閲覧を目的とした会報を刊行してきた。そして、引揚者団体の会報は、敗戦直後から刊行されているものが多く、２０００年代まで刊行され続けているものも少なくない。会報からは、戦後の長い時間をかけて書き手の世代交代も経ながら蓄積されてきた引揚者の語りの変遷を知ることができるため、引揚者集団それぞれの「物語」や「記憶」が構築されていく過程を読み取ることが可能になると考える（佐藤ら２０２０年）。また、会報に掲載された記事は回想録を出版できない「一

般」の引揚者の声としても貴重である。

そして、引揚者団体の会報に早くから注目してきた松重充浩は、安東引揚者によって発行されていた『ありなれ』を事例にその史料的価値を以下のように指摘する（松重２０１３年）。すなわち、会報に記載される現地で生活してきた人々の記憶や、地図、写真、名簿、手記など様々な情報は、「単に公的な記録や刊行物が示す事実を補塡することにとどまらない、それらの記録や刊行物では等閑視されがちな当該期日本人の生活実態を浮かび上がらせ」、それは戦前から引揚げに至る「過去」の歴史的史料ということだけでなく、「それらをそこに残そうとした方々の戦後の歩みが刻み込まれており、『安東』がその時々に持った『今日』的意義が包含されている」という。

記憶研は、これまで満鉄会、蘭星会、興農会、安東会、大連会、20世紀大連会議、八洲会、大同学院、奉天会、長春会、公主嶺会、錦州会、間島中学校、牡丹江女学校、岡山ハルビン会、哈爾濱学院、中国帰国者の会など様々な団体の会報・会誌を収集することができた。

②日記

敗戦後の引揚げに際して、ノート類の引揚船への持ち込みは当初厳しく禁止されていたため、これまでは日記や手記の類いはほとんど残されていないとされてきた。しかしながら、敗戦後の混乱した状況の中で、日記を没収されないよう秘密裏に日本に持ち帰ってくることに成功した引揚者がいたことが、調査で明らかになった。記憶研はこれまでの調査活動の中で、数種類の引揚者日記を収集してきた。そして現在、収集してきたものの一部の整理を行っており、２０２２年７月に日記集として出版する予定である。詳しくは後述するが、収集した日記の多くは日本敗戦から日本に引揚げるまでの期間中に書かれたものであるため、敗戦後の日本人の現地生活や引揚げの実態を知るための貴重な手がかりになり得る。

③手記

また、記憶研は引揚者の回想録や手記も多く収集してきた。その中には出版されていない私家版のものや、ノートに書き残したままの未刊のものも多い。例えば、満洲瓦斯株式会社で総務部人事課長として務めていた奥村松平の手記は、大学ノート5冊に分けて書かれており、約30万字からなっている。そこには、満洲での仕事や家族生活、敗戦から日本に引揚げるまでの様々な体験が詳細に記録されている。戦後長い時間が経過してから書かれたものであるとはいえ、その内容は大変詳細かつ重厚である。当該手記からは、従来の研究で明らかにされていない敗戦前後の満洲瓦斯の実態や日本人の避難生活などを知ることができる。これらを手がかりに、さらに他の史料を相互対照することで、より多様な満洲像を解明することにつながる（菅野ら２０２０年ｂ）。

## 2．記憶の発信

記憶研は、これまで国内外の学術誌や研究会、講演会、メディアなどを通して、活動成果や関連情報を発信してきた。ブログやフェイスブックなどのソーシャルネットワーキングサービスを活用した情報発信を研究会設立当初から続けてきた（文末を参照）。また、研究大会や講演会を開催し、専門家や一般の方々との交流も積極的に行ってきた。情報発信や関係者との交流、メディアからの注目を通して、研究会の活動は徐々に広く知られるようになり、それがまた新たな情報収集につながったことも重要である。

そして、記憶研が特に力を注いだのは、ニューズレター『満洲の記憶』の発行と論文集『戦後日本の満洲記憶』の出版である。以下では、この２点について

述べる。

### (1) ニューズレター『満洲の記憶』

記憶研では、活動成果を発信するために２０１５年３月にニューズレター『満洲の記憶』（年刊）を創刊し、既に第８号まで刊行している。国内外のより多くの方々に届けるために、オンラインジャーナル形式（閲覧・ダウンロード無料）を採用した（文末を参照）。ニューズレターには、史資料の紹介や目録、引揚者の体験談、研究会関連の各種調査記録、インタビュー記録などを掲載している。

例えば、２０２１年10月に刊行した第８号では、秦源治「大連・旅順絵葉書コレクション」が紹介されている。当該コレクションは大連引揚者である秦源治氏が長年にわたって収集してきたものであり、２０１６年に記憶研へ御寄贈いただいたものである。そして、目録にあわせて、解題では絵葉書を史料として扱うことの意義やコレクションの形成経緯、その特徴、意義について述べられている（大野ら２０２１）。他に、上述した満洲瓦斯株式会社人事課長の奥村松平の手記「洪熙の残照」（２）や石川光子「ある女性クリスチャンの満洲回想」なども第８号に掲載されている。

### (2) 論文集『戦後日本の満洲記憶』

①問題意識や分析視角

記憶研はこれまでの活動の１つの集大成として、２０２０年に論文集『戦後日本の満洲記憶』を出版した。本書は、戦後日本社会において満洲がどのように記憶されてきたかについて、満洲引揚者およびその２世によって書き残されてきた史料の分析から明らかにするものである。以下では、本書の「序章」（佐藤量）と「あとがき」（編者一同）をもとにその概要を紹介する。

『戦後日本の満洲記憶』表紙

本書の最大な特徴は、これまでの満洲研究の中で歴史史料として十分に検証されてこなかった満洲引揚者団体による会報を、網羅的に分析した点にある。上述したように、記憶研はこれまで様々な会報を収集してきた。本書はまさにその一部を利用した成果である。そして、本書は「いま・ここ」の場所から過去の出来事を振り返って記述している会報を歴史史料として捉えた。ただ、会報から「何をしたのか」という「客観的事実」を読み取るのではなく、当事者が語るに足る事実として何を選択し、いかに語っているのか、そしていかに「満洲引揚者」という主体が戦後社会の言説空間の中で構築されていったかを明らかにする点に注目した。

すなわち、会報に書かれたことが「事実」であるかどうかの真贋を問うのではなく、なぜそう書かれなければいけなかったのか、そこではどのような団体内部での意見交換があり出来事の取捨選択がなされたのか、そして

そのように書くことで主体がどのように形成されていったのかという表象のあり方を問いたかったのである。会報とは極めて主観性の強い史料であり、行政文書のように公的な客観性を担保された史料とは性質が異なる。そのため会報を歴史研究において活用するとき、会報という史料を、誰が、いつ、どのような状況で書いたかという社会的背景を確認することが重要である。

②各部概要

本書は、3部から構成されており、以下では各部の概要を紹介する。

第Ⅰ部「闘う記憶」では、戦後日本政府が満洲を忘却していくことを示す事例として恩給問題を取り上げた。恩給制度とは、公務のため戦争で死傷した一般文官、軍人・軍属またはその遺族に支給される年金制度であるが、総力戦としての第2次世界大戦では軍人・軍属以外の戦争犠牲者も多く、敗戦直後から誰が救済されるべきかという認定範囲をめぐる議論が繰り返されてきた。しかし満洲の場合、海外財産の喪失に伴う引揚者への見舞金給付など単独立法が制定されたものの、日本政府から国家補償を受ける恩給法の認定範囲外に位置づけられた。ここには、「国策会社」とされた満鉄や、日本軍の管理・指揮下で行動した満洲国軍も含まれる。満洲国を独立国家と認識する日本政府から切り離された当事者たちは、自らの「国家貢献」や「正当性」を訴えながら恩給請願運動を展開した。

第Ⅱ部「葛藤する記憶」では、引揚者団体内部での葛藤を経ながら自分たちの歴史を編んでいく人々の営みを描いている。ここでは、第Ⅰ部のような国家や社会に訴える活動ではなく、むしろ満洲への郷愁やアイデンティティを強く意識しつつも沈黙していた人々に焦点をあてた。満洲が断片的にしか記憶されていない戦後日本において、引揚者の郷愁は全く共感を呼ばなかった。そのため引揚者の多くは戦後社会に溶け込むことに苦悩し、引揚者集団内部でのみ記憶を共有しながら、対外的には表現しにくい自分たちの歴史を編んでいった。第Ⅱ部では、こうした引揚者の特徴的な戦後生活実践に注目し、商工業者、男子学生、青少年義勇軍の記憶表象を取り上げた。

第Ⅲ部「周縁の記憶」では、戦後社会において顧みられることのなかった満洲引揚者の中でも、ジェンダーとエスニシティの視座に着目した。事例として、これまで言及されてこなかった都市生活者の女学生の記憶や、満洲国の官僚養成学校であった大同学院出身の台湾人をめぐるライフヒストリー、戦後の日本と中国の、双方の社会の周縁に置かれていた中国残留婦人のアイデンティティ構築と記憶継承に焦点をあてた。

また、各コラムではそれぞれの章で言及しきれなかった、地域の記憶と語り、国境を跨いだ人々の記憶のあり方、自分史の編纂という自己の中での葛藤、日本・アメリカ・満洲を移動した家族の記憶と継承、メディア関係者から見た記憶の編纂について言及した。

そして、本書を通して見えてきたことは、人々の記憶から満洲が消えていくことに抵抗するように、会報を通して自分たちの歴史を残そうとしてきた引揚者の戦後史である。引揚者は、戦後何十年にもわたって集い合い、会報を残してきた。会報はその記録であり、記憶の蓄積である。戦後社会における満洲忘却への抵抗が、引揚者が戦後も満洲を語り続けなければいけなかった所以であろう。それは単に満洲を肯定的に捉えるようなノスタルジアだけが通底しているわけではない。引揚者にとっての戦後史とは、満洲が忘却されていくことへの抵抗の歴史といえよう。忘却への抗い方は様々である。本書で登場した引揚者の戦後活動を

見て、恩給問題、中国再訪、記念誌編纂、同窓会活動、記念碑建立、自分史編纂など、直截的に体制側と闘争しながら忘却に抵抗する姿勢を示すこともあれば、集団内部で経験を共有することで記憶を確かめ合うこともある。記憶形成の過程では、それぞれの引揚者による様々な思いが交錯する。そのため、会報を通して自分たちの歴史を積極的に書き残す一方で、逆にそれが満洲の侵略性を肯定しかねないことへの葛藤や中国への配慮が故に、団体の活動に一切参加しない引揚者も少なくない。そうした人々の記憶は手記や回想録を通して残されていくが、これら個人と集団の記憶をめぐる相克については今後の分析課題である。

## 3．記憶の継承へ――今後の研究活動

### (1) 論文集の出版

記憶研は、これまでの活動で引揚者から多くの貴重な史資料を御寄贈いただき、その一部を利用した分析も行ってきた。しかし、活用できたのはごくわずかであり、今後さらに多様な史資料を用いた研究が不可欠である。ここでは、研究会が目下進めているいくつかの企画を簡単に紹介する。

まずは、日記集の出版である。記憶研は現在、日本人引揚者日記４種の整理・翻刻を進めており、２０２２年７月に出版予定である。ここに収録されている４種類の日記は、すべて研究会のメンバーが活動の中で発見・整理されたものである。収録日記は、それぞれ八木聞一（満洲重工業開発株式会社理事）、安武誠子（満洲日報社記者）、池田實（公主嶺農事試験場技師）夫妻、渡部通業（満洲製鉄東辺道支社副社長）によって書かれたものである。本日記集の特徴は、異なる地域（長春、安東、公主嶺、東通化）や職業、性別の日記を収録している点が挙げられる。特に女性による日記が２種類あることが興味深い。なぜなら、女性の日記には細々とした内容（家計簿、物価、家業、育児など）も詳細に記されており、日本人の日常生活を知り得るための手がかりをもたらしてくれるからである。そして、日記単独の記述にももちろん有用な情報が多く含まれているが、複数の日記を相互対照して読むと、同じ事象を異なる角度から捉えることが可能となる。さらに、本日記集の中には敗戦前のことが記録されている日記も２種類含まれている。これらは、満洲国最末期の状況を知るための貴重な情報を提供しており、敗戦前夜の日本人の生活実態を伝える重要な手がかりである。本日記集は、引揚げ研究や満洲研究のさらなる進展に寄与できるものであるといえよう。

次は、他の関連成果の出版である。上述の日記史料集の他にもいくつかの企画が進んでいる。例えば、①秦源治「大連・旅順絵葉書コレクション」を用いて、20世紀前半期における大連・旅順を中心とする満洲の歴史を理解しようとするものや、②満洲引揚者の対中認識を分析し、満洲経験が中国認識形成にもたらした影響を明らかにするもの、③日本各地に残る様々な満洲の痕跡をたどり、その記憶のあり方を検証しようとするもの、などが挙げられる。これらはいずれも既に着手している企画である。このように、記憶研は今後もニューズレター『満洲の記憶』とあわせて、様々な形で成果を発信し続けることで、当該分野の議論の活性化につなげていきたいと考えている。

### (2) 共同研究

そして研究をさらに発展させるためには、国内外の関連機関や研究グループとの連携や共同研究が欠かせないだろう。国内についていえば、長野県の諸団体

（飯田歴史研究所や満蒙開拓平和記念館）や日本大学の研究グループが挙げられる。前者は、長年満蒙開拓団の関連研究や史資料保存、記憶継承などの活動を行ってきている。後者は、哈爾濱絵葉書のデータベース化を行い、絵葉書に写し出された場所を実際の哈爾濱の地図で確認できるという面白い試みが施されている（松重ら２００８年）。

国外についていえば、目下準備しているのは中央研究院近代史研究所のグループとの共同研究がある。当該グループは現在、中国東北地方の接収に関わっていた国民政府の要員である熊式輝の日記の整理を進めている。共同研究では、この日記と先に述べた日本人引揚者日記集とを対照させ、敗戦後の日本人の現地生活や接収、留用などの問題について双方の視点から分析する予定である。また将来的には、東アジア地域に限らず、欧米の関連機関との共同研究も重要であろう。引揚げなど東アジアで生じた諸事例は、ヨーロッパで生じたドイツ人の追放やフランス人やポルトガル人の引揚げなどの事例との比較を通して、それが持つ「世界史」的意義を解明する必要がある（松重２０１５年、蘭ら編２０１９年）。

そして、他の機関と連携して満洲研究や史資料保存の「プラットフォーム」をいかに構築していくかということも課題であろう。満洲引揚者の高齢化に伴い、史資料の収集・整理・保存の喫緊性がさらに増している中、収集・整理した史資料をいかに保管・公開するか、インタビューデータの処理・公開をどのように行うかなどについても、より多くの研究者と協力しながら議論していく必要がある。

## おわりに

本講演では、記憶研の活動に焦点をあて、その活動内容や成果、今後の研究計画などを紹介した。

記憶研の発足から間もなく９年が経とうとしている。研究会メンバーはこれまで多くの満洲引揚者と出会うことができた。引揚者の皆様はいつも私たちを温かく迎えてくださり、嫌な顔をせずに何時間も貴重な話をしてくださった。さらには、様々貴重な史資料を見せていただく機会も数多くあった。彼らが研究会の活動にこれほど好意を示してくれたのは、おそらく私たちが彼らの満洲経験に興味関心を示しているからであろう。引揚者の中には自身の満洲経験を何らかの形で残そうとする意思はあるものの、家族をはじめとする周囲の人に聞いてもらえない、理解してもらえないという「わだかまり」を抱えながら晩年の生活を過ごしている人も少なからずいる。経験を「残したい」引揚者と、経験を「聞きたい」私たちの双方の需要と供給が一致していたといえる。記憶研活動は、彼らにとって満洲経験を「語る場」、満洲記憶を「保存する場」としての役割をも果たしていたかもしれない。満洲記憶が日本社会から「消え去ろう」としている時期の活動だからこそ、引揚者が私たちに積極的に語り、多くの史資料を寄贈してくださった。これもまた引揚者にとっての「忘却」への「抵抗」といえよう。

最後になるが、これまで研究会の活動が全国各地で順調に展開できたのは満洲引揚者やその家族、各分野の研究者など各位のご厚意とご理解によるところが非常に大きい。お名前を逐一挙げることはできないが、この場を借りて心より御礼申し上げる。

### 参考文献

蘭信三・川喜田敦子・松浦雄介編（２０１９年）『引揚・追放・残留――戦後国際民族移動の比較研究』名古屋大学出版会。
飯倉江里衣・尹国花・大野絢也・菅野智博・佐

藤量・新谷千布美・馬海龍・湯川真樹江（２０１４年）「『満洲の記憶』研究会の設立背景及び活動の紹介」『ＮＥＷＳ　ＬＥＴＴＥＲ』（近現代東北アジア地域史研究会）第26号。
飯倉江里衣・大野絢也・菅野智博・林志宏・佐藤仁史（２０１５年）「日本『満洲的記憶』研究会紹介」『国史研究通訊』第８期。
大野絢也・尹国花・菅野智博（２０１６年）「一位日本少年的大連記憶――秦源治先生訪問記録」『口述歴史』（中央研究院近代史研究所）第14期。
大野絢也・佐藤仁史・梅村卓（２０２１年）「補強される植民地の記憶――秦源治『大連・旅順絵葉書コレクション』解説」『満洲の記憶』、第８号。
加藤聖文（２０１５年）「引揚者をめぐる境界――忘却された大日本帝国」安田常雄編『社会の境界を生きる人々』岩波書店。
加藤聖文（２０２０年）『海外引揚の研究――忘却された「大日本帝国」』岩波書店。
菅野智博・甲賀真広（２０２０年ａ）「夢回公主嶺――土屋洸子女士訪問記録」『口述歴史』（中央研究院近代史研究所）第15期。
菅野智博・甲賀真広（２０２０年ｂ）「満洲瓦斯株式会社人事課長の満洲追憶――奥村松平『洪熙の残照』解説」『満洲の記憶』第７号。
貴志俊彦・松重充浩・松村史紀編（２０１２年）『二〇世紀満洲歴史事典』吉川弘文館。
坂部晶子（２００８年）『「満洲」経験の社会学――植民地の記憶のかたち』世界思想社。
佐藤量・菅野智博・湯川真樹江編（２０２０年）『戦後日本の満洲記憶』東方書店。
松重充浩・千葉正史・林幸司（２００８年）「日本大学文理学部情報科学研究所所蔵『ハルビン絵葉書（黒崎コレクション）デジタルアーカイブ』構築の試みについて」」『News letter』（近現代東北アジア地域史研究会）第20号。
松重充浩（２０１３年）「『ありなれ』（第１～56号）総目次」『News letter』（近現代東北アジア地域史研究会）第25号。
松重充浩（２０１５年）「『世界史』から満洲史を考える――『20世紀満洲』の射程に関する覚書」加藤聖文・田畑光永・松重充浩編『挑戦する満洲研究――地域・民族・時間』東方書店。
「満洲の記憶」研究会編集委員会（２０１６年）「『満洲の記憶』研究会の活動紹介――史資料の収集及びニューズレターの発行を中心に」『東方』第４２３号。
山本有造編著（２００７年）『満洲――歴史と記憶』京都大学学術出版会。
湯川真樹江・瀬尾光平（２０１７年）「『満洲記憶』研究会活動内容以及各種帰国日本人団体的介紹」『香港浸会大学近代史研究中心通訊』第２号。

**「満洲の記憶」研究会関連ホームページ**

「満洲の記憶」研究会ブログ：http://manshunokioku.blog.fc2.com/
ニューズレター『満洲の記憶』：http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/handle/10086/27095
Facebook 公開グループページ：https://www.facebook.com/groups/359559308774 70/

（２０２２年３月４日・オンライン講演会）

## 筆者略歴（かんの　ともひろ）

専門は中国近現代史、東アジア近現代史。
１９８７年中国吉林省長春市生まれ。２０１１年宇都宮大学国際学部卒業、学士（国際学）。
２０１３年一橋大学大学院社会学研究科修士課程修了、修士（社会学）。
２０１８年一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程修了、博士（社会学）。日本学術振興会特別研究員（ＰＤ）、慶應義塾大学非常勤講師、中山大学歴史学系（珠海）副教授などを経て、２０２１年より慶應義塾大学経済学部准教授に着任。
主要業績には、『戦後日本の満洲記憶』（共編著、東方書店、２０２０年）、「近代南満洲における農業労働力雇用――労働市場と農村社会との関係を中心に」（『史学雑誌』第１２４編第10号、２０１５年）、「分家からみる近代北満洲の農家経営――綏化県蔡家窩堡の蒼氏を中心に」（『社会経済史学』第83巻第２号、２０１７年）などがある。

# 陶々俳壇（ようよう）

陶陶句会結果
2021年8月

## 兼題　「赤まんま」「来」　馬場由紀子選

炎天やユンボ操る中東語　松島一三四

○正子　真夏の土木作業の大変さ、まして異国での。情景がよく切り取られています。

○紅杓

◎善一　炎天の真昼間、ユンボを操作しているのはペルシアあたりの異邦人であることが、その会話で判った。「炎天や生き物に眼が二つづつ　林徹」日本の暑さをどう感じているのでしょうね。

○由紀子

その先に縋るものあり牽牛花　〃

○正子　縋るものを探している長く伸びた蔓。

◎由紀子　朝顔の蔓はなぜああも伸びていくのか。油断するとあっと言う間に蔓延ってしまう。それは縋るものを求めてのこととは、なんと切ない。

ランドセル下ろしてひとり赤まんま　〃

○正堂　赤まんまを手に帰宅してひとり眺めている小学生は何を思っているのかな。

○京

雲海や怒涛となりて尾根を越す　大内善一

○正子　夏らしくダイナミックな積乱雲の景です。

◎紅杓　眼下に広がる夏山の景。テラスから見下ろす眺めは絶景で流れる雲の影、変化する景色は時の流れを忘れさせる。このあと露天風呂と川魚の炭焼き、山菜、きのこが待っているのであろうか。

・由紀子　スケールの大きな景。

霧晴れて仔牛よろよろ立ち来たる　〃

◎正堂　朝霧の晴れた柵に立つと仔牛がおぼつかない足どりで寄って来る景が眼に浮かぶ句。

赤のまま牧牛立ちて眠りをり　〃

○二三四　○紅杓

○由紀子　のんびりとした景が幸せを誘う。

透きとほり翡翠のごとし蟬の羽化　日野正子

○正堂　○紅杓　○京

風や風くるくるまわる風ぐるま　〃

○善一　断捨離の「断」は仏教語で「煩悩を断つ」とあり、「断」つまり煩悩を残したまま今年も除夜を迎えてしまったということか。

玄関に生けられし赤まま心意気　〃

盆近し母恋しかりいつまでも　上野京

夏来たり昔なつかし夕すずみ　〃

赤まんま母懐かしきことしきり　〃

名刹や参詣を呼ぶ花手水　伊藤正堂

○二三四　○紅杓

○善一　名高い寺に詣でた折手水鉢に、季節の花が浮かべられていて、よりすがしく感ぜられた。「蓮咲いて風その上をその下を　伊丹三樹彦」

○由紀子　美しい。名刹の佇まいがよく表れている。ただ、このままだと桜の花びらが浮かぶ手水ということになる。当季の風情を出すには、この花の名を具体的にあげた方がよろしいかと。

来客や床の間飾る赤まんま　〃

○紅杓

○善一　久しぶり友人が来るので、床の間に赤い小花をつけた「赤まんま」を飾った。「赤のまま記憶の道もここらまで　下村ひろし」

ホを抜いて啼く鶯や今朝も来る　〃

○二三四

○正子　確かにケキョ、ケキョと鳴く鶯がいます。

○善一　今朝もケキョケキョと鶯の谷渡りの声がきこゆる。「うぐひすの啼くや小さき口開けて　蕪村」

底紅の緑に囲まれ高い位置　橋本紅杓

蜩の樹林のなかを過ぎにけり　〃

みんみんも混じりしぐれる自然林　〃

白桃の産毛に沈みたき眠り　馬場由紀子

◎二三四　○正子

鉄漿色のどぶ渡り来て残暑かな　〃

◎正子　気になる句です。「鉄漿色のどぶ」の意味を考えました。風水害の受難に加えて残暑の厳しさ。

・由紀子　かつて浅草界隈を吟行したときのことを思い出して作りました。吉原を囲むおはぐろどぶを念頭に置いて。

赤まんま夢に旅する生家かな　〃

○二三四　○正子

【添削例】

外来者日本の夏はきびしかり

この句はオリンピックの選手を思って作られたものだろう。それなら、外来者は選手と言い切った方が良い。

選手らに残暑きびしき五輪かな

これで読み手には伝わるだろう。

花の香の漂うベンチに休みけり

桜の木の下のベンチで休んでいたという句。気分の良い景だが、説明になっているところが残念。せっかくなら初秋の気分も味わいたいので、

老いの身を休めるベンチかなかなかな

と添削。

さつまいも掘るや日向に日陰なし

日向は影がないから日向というのであって、この理をここで念を押す必要があるかどうか、今一度考えてみる必要があるかと。

甘薯ほる畑に農夫の影ひとつ

としてみた。

月明かり今宵も鳴くや畠の蝦蟇

俳句は瞬間の感動を表現することを基本としている。そうなると「今宵も」が気にかかる。

月煌々畠に眠らぬ蝦蟇

時期になると蛙が毎夜鳴くことは皆知っていることなので説明は省いて、瞬間の景を詠んだ方が訴える力が強くなるだろう。

会員彼是

# 中東噺

# イランと「おしん」

牛木久雄（会員）

昨年（２０２１年）インターネットで中東イスラーム情報を探っていたら、朝ドラ「おしん」の話題を見つけた。「おしん」人気がイラン社会に大きな印を残したと言うのである。それが「タナクラ・バザール（タナクラ市場）」だと言う。

更に検索してみたら、「タナクラ・バザール：日本の人気朝ドラ「おしん」のイランにおける遺産」（ブログ投稿。注を参照）が見つかった。

タナクラ・バザールの看板
（A. Shams, 2021）

それには、世界七〇か国以上で大ヒットした「おしん」のイランにおける人気の事情が書かれていた。論文の内容も含め、この話題を紹介したい。

## 一．「タナクラ・バザール」とは

「バザール」は、ペルシャ語で「市場」あるいは「商店街」を意味する。「タナクラ」は、「おしん」の姓「田倉（たのくら）」がペルシャ語訛りで転記された結果である。上図は、「タナクラ・バザール」の看板で、ペルシャ語で「輸入品専門　タナクラ・バザール　電話・ファックス＊＊＊」と書かれている。

この新種の店が登場したのは、イランで「おしん」が放映された１９８６年で、この年、イラン国営テレビから毎週土曜日夜の連続テレビ・ドラマとして「おしん」が始まった。「おしん」は、たちまち大人気となり、夜９時の放映時間になると、いつもなら夜の客で賑わう繁華街が空っぽになった。中東の街に、「おしん」は大異変を起こしたのである。イラン国民の八九％が「おしん」を観たと言われている。当時、イランのテレビ普及率がイラン・イラク戦争前の二〇％台から、八〇％台に増大したことも、タイミングとして効いたのだろう。

## 二．「タナクラ・バザール」登場の背景

「タナクラ・バザール」登場の時代は、１９８０年９月に勃発したイラン・イラク戦争の終盤の頃で、戦死者は既に一〇万人を突破し、七五万人に近づいていた。太平洋戦争の日本の戦死者二三〇万人には及ばぬまでも、当時のイランの人口が約五〇〇〇万人であることを考えると深刻な数である。銃後を守るイランの妻たちは厳しい生活を強いられたが、「おしん」が戦争に翻弄され何度も挫折しながら、そのつど立ち直り、ついに夜店の古着屋で成功するのをみて感動した。彼女たちは「おしん」の粘り強さと起業精神に励まされ、当時求められていた格安衣料品の古着販売に進出した。その結果、「タノクラ＝タナクラ」を冠する古着店を始めたのである。

最初の「タナクラ・バザール」は、イラン西部クルディスタン地方に登場した。それは、トルコ国境のウルミエ湖地方、マハーバード市で、国境越しに担ぎ屋が持ち込む密輸品や、輸入古着を扱った。「タナクラ・バザール」は、たちまちテヘランをはじめガズヴィーン、マシュハドなど全国主要都市に広がった。

「タナクラ・バザール」は、現在では、古着やセコハン商品、格安輸入衣料品を扱う店の一般

▶バザールのアーケードと屋台◀

的名称である。

イランと日本の関係は、奈良正倉院のシルクロード由来御物にさかのぼる古さであるが、イランと日本の外交は、明治政府の使節がカジャール朝イランの皇帝ナスレッディン・シャーを表敬した1880年に始まる。この使節はロシア帝国の首都サンクトペテルブルクに赴く途上、イランに立ち寄ったのであった。

その後の日本の発展に刮目したイランは、日本を東洋近代化のモデルとした。1930年代には日本はイランの主要貿易相手国となった。パハレヴィー朝時代になると「西アジアの日本」を目指してイランは工業化を進め、1970年代にはインド洋での覇権を目指すまでになった。イスラーム革命が起こりホメイニ体制になってからは、ラフサンジャニ元大統領が提唱した「イスラームの日本」がイランの目標となった。

## 三、中東における「おしん」現象

ホメイニ革命は外国映画を禁止したが、「おしん」は、緩和後初の許可作品である。放映時のペルシャ語タイトルは「故郷を離れた日々」であった。その後、イランでは「おしん」を皮切りに、韓国映画、インド映画、欧米の名画が次々と許可された。

「おしん」によって、イランにおける美人観も変わった、欧米風の金髪碧眼から、東洋風の丸顔でアーモンド形の黒い眼になり、「おしん」の髪型が流行して、「オシニー＝おしん風」と呼ばれるようにさえなった。1989年の視聴者電話参加番組では、「イラン人にとって理想の女性は誰か？」という問いに対し、イスラーム史上の有名女性に加え、「おしんである」という回答が寄せられた。

パハレヴィー朝イラン帝国を打倒したイスラーム革命によって、イランでは女性抑圧が強化されたと捉えられがちである。確かに服装に関する規制は厳しく、公的施設には、必ず「イスラームの服装規定順守なき女性の立ち入りを禁止する」の表示があり、街頭で女性の服装を監視する当局との悶着も報じられる。しかし、この種の常識とは異なり、女性の権利は大きく拡大されている。革命以前のパハレヴィー時代は、イスラーム法に従って女性の離婚権はなかったが、革命イラン議会は女性議員によってこれを廃止し、「三下り半」の時代は終了した。茶屋や食堂での女性隔離コーナー強制もなくなり、革命後はモスクでも、女性が大っぴらに集まるようになった。これに影響され、イスラーム各国の女権拡大運動が活発化し現在に及んでいる。

イランは、ホメイニ革命の海外展開や、革命防衛隊の軍事進出、イスラエルに対抗するためとされる核開発問題などで、現代国際政治では無視できない地位を占めるようになった。中東は、パレスチナ問題が中心だった従来の構造から、アラブ対ペルシャ（イラン）の対立に移行する趨勢である。この対立構造では、なんとイスラエルがアラブ側に立っている。激動の中東を注意深く観察し、いっそうの理解に努めなければならない。

（注）

Alex Shams, 2021, University of Chicago, “Tanakura Bazaar: The Iranian Legacy of Beloved Japanese Soap Opera Oshin”

## 育児休暇延長に現実の壁

２０２１年８月20日、全国人民代表大会常務委員会会議で人口と計画出産法の修正案が採択され、夫婦１組に３人の子どもが認められるようになった。これに合わせ、地方条例の改訂も行われ、二十数の省で行われた出産、育児休暇の延長、手当の見直しなどが注目されている。

企業も準備を進める中、民間企業に勤める方琪（仮名）のように２人目を妊娠しながらも権利を享受するつもりのない女性もいる。彼女は職探しの苦労を思い出す。「既婚だが子どもを産む予定はないとキャリア計画をいくら説明しても、私より資質も学歴も劣る男性がいいという会社が多かった」というのだ。

当分出産しない約束でなんとか仕事を見つけた彼女、３年後に長男を妊娠。体調が優れず仕事に影響するや、上司からポストの変更、事実上の降格を提案された。出産後も戻れないと知り、会社を辞めた。１年間育児に専念した後、再就職先を探した。もう出産したのだからすぐに見つかると思ったが、２人目に関する質問と１年間のブランクが思いがけず道を阻んだ。運よく心に適った仕事を見つけたが、次は「長く休みたくない。産後体が回復すればすぐ復帰するつもり」だという。

北京のＩＴ関連会社で人事を担当する王琳（仮名）は出産育児休暇の延長を、「国の招待客の勘定を企業がもつようなもの」と表現し、企業の女性採用意欲に影響すると指摘する。妊娠から出産、子どもが２歳３歳になるまでの期間、女性の昇進や昇給は難しくなるだろうとも。

公営の事業体の人事担当者は、在職の女性にとっては、給与にも昇進にも影響しない優しい制度だが、これから就職を目指す女性には優しくないという。つまり事業体は同じ条件ならば男性をほしがるというのだ。

華中科学技術大学社会学院の先日の調査では、出産後の妻の就職率は６・６％下がり、世帯の労働収入は５・６％下がること、２人目出産後はさらに就職率が９・３％下がり収入が７・１％下がることが示された。

先日公開された『湖南省人口と計画生育条例修正草案』の修正理由に休暇期間が長すぎることは却って女性の就業に悪影響を及ぼすと付記されていたことは注目に値する。

（『法治週末』２０２１年12月16日）

## 高齢者に運転免許を

２０２０年11月20日から、70歳という小型自動車、小型バイクの運転免許申請年齢の上限が撤廃されることになった。但し、70歳以上の人は通常の運転免許取得試験に加え記憶力、判断力、反応などの能力テストが付加されるほか、安全運転できる身体状況であることが条件となる。これにより70歳以上の高齢者に運転の道が開かれた。しかし高齢者の運転の安全性に懐疑的な若者たちは制限撤廃の理由に疑問を感じている。

一方、教習所の中には高齢者に特化した教習計画を策定するところもある。若い人よりも運転技術習得には多くの時間数を要するだろうし、試験合格率も低いだろうと、この道８年のある教官は予想する。安徽省合肥市の自動車学校では、教官の中から忍耐強い人を選び、高齢者の教習担当とした。さらに試験場に担当者を派遣するほか、高齢の教習生には全教程にわたりカウンセリングも行う準備もした。北京市海淀区にある自動車学校では高齢者教習コースを設けた。費用は８千元ほどと、一般コースよりもやや高めだ。ま

た、ある学校では高齢者の申し込み状況を見極めてから専門のコースを策定するかどうか決めるという。人が少なければ、個別に対応するつもりだという。

専門家は、かつての輝きを失った自動車教習業界には希望の光になると同時に、さらなる安全技術や運転サポート技術の実用化が高齢者の運転の安全をより確実なものにするだろうと指摘している。

（『瞭望東方週刊』2021年第25期12月16日）

## 太陽光パネルに群がるもの

河南省鄭州市発展改革委員会は11月1日、市全域で展開していた、民家の屋上に居住者自身の資金でソーラーパネルを設置するプロジェクトを一時的に停止すると通知を出した。2021年6月に民家ソーラーのモデル地域に名乗りを上げて以来、設置が加速され、民家の分散発電量が集中発電場のそれを上回るに至った矢先だった。

2009年に国は「金太陽プロジェクト」を立ち上げた。屋上ソーラーパネルの設置に補助金を出すというものだ。地方の村の民家の屋根に設置すれば、10億キロワット、市場価格3兆の電力になる。地域全域でソーラーパネル設置に取り組むことは、カーボンピークアウト、カーボンニュートラルと地方振興の2つの国家的重要課題への大きな一手となる。

しかし、この熱狂の中で数年前から流行している「ソーラーパネルローン」によって、多くの金融機関やソーラーパネル企業が参入し、その中で資金をだまし取られたり、規格外の製品をつかまされたり、システムの運営維持がなされないなどの事例が頻発、巨額の借金を抱え込む人も増え、銀行は不良債権を抱え込むに至った。

一部の企業はもうけるチャンスとばかりに、競い合って契約はとるが、一向に設置しなかったり、宣伝に虚偽があったり、元々技術がなかったりと、砂糖に群がる蟻さながら市場をかく乱。素人にセールスをさせ、設置条件を満たさない屋根だろうが、お構いなく売り込む。パネルの品質も玉石混交、設置もいい加減で、アフターサービスもない。損をしたのは多くの大衆だ。

屋上のソーラーパネルは最も庶民生活に近い新エネルギーだ。無秩序な発展により、人々の心は離れ、再生可能エネルギーの発展、脱炭素社会の形成に悪影響を与えている。屋上ソーラーパネルの発展は統制のとれた計画的なものでなければならず、皆にメリットがあるものでなければならない。

（『経済日報』2021年12月23日）

## 農村の休眠地を活かせ

2015年の初め、甘粛省定西市隴西県で農村集団経営の建設用地を市場に投入するという土地改革が試験的に実施されて以来、制度上の保障が確立し、これまで122区画約38㌶の眠っていた資源が活きた資産となり、村の振興に力を与えた。

市場投入では、主体、ルート、方式、形式、用途が決められる。意思決定は集団の経済組織会議で検討される。市場投入と契約の過程は公開され、郷鎮政府、国土局、指導者らによる検討グループが審査する。最も重要なことはお金の流れが透明であることだ。収益の分配の決定は農民と集団に委ねられる。

農村土地制度改革の目的は集団所有の土地も国有地と同等の権利と価値と責任のもとに運用されることだ。だが、農村集団経営の建設用地は総面積が小さい上に、区画ごとの面積も小さく、かつ分散しているため、利用効率が低く、活用法が見つかりにくく、結果、国有地に比べ、金融機関からの評価が低く、企業融資なども取り付けにくいことが調査でわかった。

現場の行政職員からは、市場投入のための細則を作り、農村集団経済組織の財務管理能力や監督管理能力の向上を図るとともに、土地の集約化と産業の大規模化を図ることが地方活性化を後押しすることになるという意見がきかれた。

（『経済参考報』2021年12月28日）

# 協会通信

## ◆第1回理事会の議題（4月20日開催）

今月は5月の社員総会を控えて、その議題等を審議する理事会となった。主な内容は次の通りである。

●確認事項

3月16日開催の第9回理事会の議事録（案）確認の件

●決議事項

1　新会員4名入会審査の件

2　令和4年度事業計画（案）：審議の結果特に異論はなく、第11回定時社員総会の「報告事項」とすることを決議した。

3　令和3年度事業報告（案）：必要な個所を修正し、「第1号議案」として付議することを決議した。

4　令和3年度決算（案）：「第2号議案」として付議することを決議した。

5　理事5名選任の件

6　監事1名選任の件

7　顧問・諮問会改選（案）

●報告事項

1　資金繰りについて（定例報告）

2　常任委員会報告（定例報告）

＊理事会は対面で行い、午後1時に開催し、午後3時40分終了した。

（事務局長　藤沼弘一）

## 会員だより

**◎新会員〈正会員〉**

横溝由紀子氏　村瀬　康氏

鮫島明子氏　菅野智博氏

**◎訃報**

土屋民雄氏（81歳）

令和4年4月19日逝去

謹んで哀悼の意を表します

## 同好会だより

**〈一石会（囲碁）〉**

対面での例会はコロナ感染拡大の状況を見ながら開催いたします。会員募集中。

**〈俳句会〉**

対面での俳句会はコロナ感染拡大の状況を見ながら、通信と並行して開催いたします。

**〈謡曲会〉**

松木千俊先生のお稽古は一人ずつの個人指導です。ご興味のある方は、事務局までご連絡ください。

## みんなの写真館

### 阿寒湖（表紙）

阿寒湖は北海道で5番目に大きな湖で、約15万年前の噴火によって誕生したカルデラ湖です。写真右側の山は阿寒湖の東側に圧倒的な存在感で聳える標高約1371mの山で、その雄々しい姿からアイヌ語で「ピンネシリ（男性の山）」と呼ばれてきました。湖畔のホテルに泊まったので、早朝湖畔の散歩中にあまりに景色に感動し、阿寒湖の美しい姿を写真に収めた。（姜晋如）

### 陝北（陝西省北部）に向かって行こう（表4上）

1935年9月毛沢東の率いる中共第一軍が命からがら28000華里の苦闘と逃亡の果てに行き着いた甘粛省の哈達輔の写真。最後の激戦地となった甘粛省の「腊子口」の国民党軍に勝利し、哈達輔に入り、やっと暫しの休養を取った毛沢東委員長は周恩来の宿舎の中にある共産党本部に入ったとき、『山西日報』の記事を見て、「そうだ陝北に劉志丹がいる。そこに行こう」と、はたと気が付いた。ここまで当てもなく、逃げ回っていた紅軍の最後となる行き先が決まったのである。各地で個々に戦っていた紅軍は次第に陝西省北部に集結していき、1936年12月12日西安事変が起こり、第2次国共合作がなり、1937年7月7日盧溝橋事件が始まり、日中戦争の泥沼に入っていく。こうして日本の敗北につながっていく過程を振り返ると、このモニュメントの意味の重要さがわかる。長征一行を陝西省北部で迎え入れた劉志丹は2年後に遊撃戦の中で戦死した。中国の革命史の中でこの長征と西安事件は最も重要なエポックである、と筆者は考える。（八島継男）

### 解体後の築地市場（表4下）

築地市場は2018年10月6日に83年の歴史に幕を閉じ閉場した。

1935年日本橋魚河岸から築地に移転した。閉場後、新豊洲市場に移動した。市場解体は閉場直後から工事が始まり、2021年7月開催東京五輪の選手、関係者らの輸送拠点として利用後、新型コロナ感染者用・築地デポ東京酸素／医療提供ステーションとして医療施設となった。（村田嘉明）

# 2022年６月の行事予定

２日（木）　14：00　公開 第５回オンライン講演会（Zoom方式で実施）
「中国社会の実態、とりわけ共同富裕と農村社会の変容」
厳善平氏（同志社大学大学院グローバルスタディーズ研究科長・教授）

８日（水）　13：00　俳句会
兼題「さくらんぼ、筒」及び当季雑詠から５句を投句（５月末までに）

14日（火）　16：00　謡曲会（松木先生お稽古）

22日（水）　14：00　公開 【善隣古海塾】（Zoom方式で実施）
塾長：古海建一氏（当会最高顧問）

29日（水）　14：00　公開 第６回オンライン講演会　（Zoom方式で実施）
「天皇と戸籍」
遠藤正敬氏（早稲田大学台湾研究所非常勤次席研究員）

## ６ 月 の 会 議 予 定

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 6日（月） | 13：30 | 講演委員（Zoom） | 14日（火） | 13：00 | 国際交流委員会 |
| 7日（火） | 13：00 | 環境委員会 | 22日（水） | 14：00 | 東北委員会 |
| 9日（木） | 13：00 | 理事会（第4回） | 24日（金） | 13：00 | 諮問会（第1回） |
| 9日（木） | 15：30 | 広報委員会 | | | |

※下線は通常日程に変更あり。

# みんなの　写真館

INTERNATIONAL GOOD NEIGHBORHOOD ASSOCIATION（IGNA）
https://www.kokusaizenrin.com

ISSN0386-0345
二〇二二年（令和四年）六月一日・毎月一日発行
「善隣」第五二五号（通巻七九二）
発行所　〒一〇五-〇〇〇四　東京都港区新橋一-五-五
一般社団法人　国際善隣協会
電話　〇三-三五七三-三〇五一番（代表）